

つまり、支那やタイやその他世界の後進國政府に自國の顧問を入れ、その顧問に大英帝國の威光に物をいはせ、自國に有利に導くといふ方法をとつてゐた手を用ゐようといふ肚である。

その位のたくらみが看破されぬ筈はない。駒井長官は少し擲揄氣分になつて、

「この國は、滿洲國人と日本人とが協力して建設した國家であつて、新國家の公文は滿洲國語と日本語とによつて行はれる。従つて、滿洲と日本の國語を完全に使ひこなせる人で、しかもわが滿洲國の與へる待遇に甘んずる人であつたならば、國籍のいかんを問はずどん／＼採用する考へである。これが、私の各國人の機會均等に對する回答です」

と、彼等の國の人間にとつて不可能なことを述べた。

この場合、敵性をいだいてゐる彼等に對して、遠慮もクソもあつたものではない。

リットンも、この答へに對してはさすがに澁い顔をして苦笑をもらしてゐた。

「ほかに質問はありませんか」

駒井長官は、あくまで彼等を嘗めたやうに言つたが、その態度だけは、いかにも謹嚴らしく装

つてゐた。

「いや、もうほかに質問はありません。これで滿洲國の立場が十分了解できました。どうも御苦勞さまでした」

と、一同慇懃に禮を述べた。

その前後、彼等は關東軍司令部の首腦者その他にも會見したが、やはり至るところで軽く捌かれた。

もし、彼等にして進んで滿洲事變の真相を把握しようとし、滿洲國の立場を理解しようとするならば、自ら彼等に對する態度もちがつてくるが、入滿する前に上海や南京や漢口や北京などで聞いた抗日支那人の話によつて、つちあげた先入感を以て臨み、日滿兩國人をまるで被告扱ひにしたので、當然さうした結果にならざるを得なかつたのだ。

調査團は六週間ほど滿洲に滞在し、物見遊山氣分で、哈爾濱、チチハル、大連、錦州などを視察したが、それでも新京驛から引きあける時、リットンは見送りに行つた駒井長官と握手しなが



ら、聲をひそめて、

「貴國の健全な御發達を、心から祈ります」

と、しみじみとした口調で言つた。

六週間も滿洲にゐて、あらゆる方面を見た彼としては、本當にさういふ氣持になつたのかも知れない。

### 内田外相の焦土戰術

滿洲を引きあげた聯盟調査團一行は、再び北京に赴いて南京政府の要人連を呼びよせた。それに應じて、飛行機で飛んできたのは宋子文、羅文幹などであつた。それに張學良も加へて

滿洲で調査してきたことを報告し、その解決案として南京政府要人等の意見を徴した。

南京政府要人等が提示した解決案なるものは、  
一、滿洲に廣汎なる自治を許すも、名目上の主權は支那に保存すること。

二、滿洲における日本の權益はこれを承認す。

三、滿洲より軍隊を撤退し、一切の軍政状態を改めて、純然たる文治制度を敷く。  
と云ふ三點であつた。

恰もこの時、日本では滿洲國を承認するといふ説が傳へられてゐたので、調査團は急いで七月初め再び東京へ赴いた。

調査團は、南京政府の提案を示して、外務大臣内田康哉伯にその承諾を迫つた。

内田外相は、滿洲事變勃發前から、滿洲建國直後まで滿鐵の總裁であつた人で、いはゞ滿洲國を育てた主要人物である。

もちろん、南京政府の提案など受付くる筈はなく、これを一蹴したばかりか、あくまで滿洲國承認の決意を堅持し、焦土戰術を以てもなほ日本と滿洲國の主權を貫徹すると言明したのであつた。

内田外相の強硬な對聯盟態度によつて、一行はいよいよ憂鬱となり、殊にリットンの如きは東



京で病氣になつてしまつた。

それから一行は、三たび北京に赴いて、こゝで初めて聯盟本部に對する報告書の起草に着手した。

リットンには、病床でペンを執るといふ哀れな状態であつたが、それでも彼は非常に日本及び滿洲國に對する強硬な排撃的意見を主張した。

他の委員、なかんづく獨伊委員は、

「リットン卿よ、そんな純理論ばかりでこの問題は解決されるものではありません。もつと東洋の現實に即した判断をなさねば豫想外な大紛亂を惹起するかも知れませんぞ」と注意した。

けれども、リットンは委員長資格で頑張りどほし、

「私には、私の意見がある」

と言つて、あくまで支那を庇護することに努めた。

この間、彼の言動に對して不愉快なニュースが頻繁に日滿兩國に傳つた。それはリットンが南京政府側の要人及び張學良の一派と、怪しからぬ闇取引をやつたといふことである。

リットン自身も、内田外相の強硬論に反感をいだいてゐたし、殊に英國政府や、英國政府と歩調を一にする米國政府の排日滿の後押しがあつたので、彼の態度は頗る不明朗であつた。

かうして一ヶ月餘を費して九月四日に報告書が完成した。この報告書は、隨員の一人が携へて秘密裡にシベリア鐵道經由九月二十二日に聯盟本部に寄託された。

この間、日本は九月十五日滿洲國を正式に承認した。

報告書の内容がどうであらうと、一定の目標に向つて邁進する日滿兩國にとつては關知するところでなかつたが、しかし正常な認識の下に作成されることを希望した。

報告書は、九月三十日に日支兩國外務省に手交され、十月二日を以て一般に發表された。

日滿兩國の軍官民は、その報告の内容があまりに一方的で、徹頭徹尾日滿兩國を排撃し、壓迫するものであることに痛憤措くところを知らなかつた。



リットンが、新京驛頭で駒井長官に對して「心から貴國の健全なる發達を祈る」と言つたのは全く彼れ自らを欺くものであつた。

報告書は、本文三百八十九頁（外務當局の邦譯約十八萬語）のほかに、附屬書といふ浩翰な文書から成つてゐたが、その要旨を要約すると、

- 一、滿洲事變の直接原因たる日本の軍事的行動は正當防衛性にあらず、計畫的行動である。
  - 二、滿洲建國は民族自決運動の結果ではない。
  - 三、滿洲國の新政府は否認する。
- と、獨斷と臆測と傲慢から來たものであつた。

日滿兩國は、どうせ調査團の報告書には、ろくなことは書いてあるまいとは期待してゐたが、あまりに日本を侮辱し、滿洲國を輕視したことに對し、もはやこの上は徹底的に聯盟と戦ふ覺悟を固めた。

當の責任者である内田外相は、いよ／＼焦土戰術論を強調して、輿論の統一をはかつたが、

悲しいかな、その時代まではまだわが國にも親米英、恐米英主義者が相當にゐて、却つて内田外相の烈々たる愛國の至誠にケチをつける者さへあつた。

### 松岡洋右の登場

リットン報告書を審議すべき聯盟理事會は、昭和七年十一月二十一日からジュネーヴの聯盟本部で開かれた。

内田外相は、この審議會に派遣すべき帝國全權の人選について大いに苦心した。その結果、膽力もあり、機略にも富み、そして滿洲の事情にも精通し、且つ英語を自由にあやつることの出来る松岡洋右氏を推選した。

當時、松岡氏は政友會所屬の代議士であり、以前は外務畑にゐたこともあるが、當時は全然外務省と縁が切れてゐたので、世間では意表外な人選として非難する向もあつたが、内田外相はよく松岡氏の爲人を知つてゐたので、世評などにこだはらず、斷乎として松岡氏を帝國全權の大任



に就かしたのであつた。

なほ、松岡全權の隨員として、軍部から建川美次、石原莞爾の兩氏が同行したことは、いかに聯盟會議を重視したかと分る。

十二月六日聯盟總會が開かれた。

それは、「リットン報告」及び日支兩國の意見書並に陳述を基礎として、滿洲問題を總括的に批判検討するもので、聯盟加入の四十四ヶ國の代表が出席した。その内一ヶ國は日本であり、他の一ヶ國は終始わが國の態度に好意を表してきた暹羅國即ちこんにちのタイ國であつて、他の四十二ヶ國は全部反對の態度を示した。

彼等四十二ヶ國は、リットン報告をそのまま無條件に採りあげ、これに基いて滿洲問題の解決にあたらうとした。

松岡全權は、孤軍奮闘して極力リットン報告の誤謬を指摘し、本問題の解決は日支兩國の直接交渉によつてのみ解決さるべきものであると主張した。

しかし、彼等は徒らに空理空論に走しつて、紛争解決の端緒をも捉え得なかつた。

そこで、問題は十九國委員會に附託され、和協手續がとられた。けれども十九國委員會は和協手續をとらず、わが國に對して不當な勸告案を決議し、これを松岡全權に突きつけた。

その勸告案なるものは、日本軍は全部滿鐵附屬地に引きあげよ、宗主權は支那にあつて、滿洲國の建設など以ての外であるといふのが骨子であつた。これが、日本政府に手交されたのは昭和八年二月十一日で、一般に發表されたのは二月十七日である。

日滿兩國の憤激はその極に達した。そして、かゝる理不盡な國際聯盟を敢然脱退すべしといふ輿論が暴風のごとく卷起つた。

しかも一方滿洲國は、建國すでに一ヶ年に垂々とし、逞しい歩調をもつて建國の大理想に向ひ總進軍を開始してゐた。

しかし何たることぞ、日本にも滿洲にも、國際聯盟を脱退することを躊躇する者が少くなかつた。それは、聯盟脱退は全世界を敵とすることを意味し、日本の國力を以てしては、とうてい世



界を相手に戦ふことは不可能である——といふことからきてゐる。

一九四

ワシントン會議やロンドン會議で、日本が不當な海軍兵力の比率を強ひられたのも、實にかうした國內の弱音が相手國に手にとるやうに反映し、且つ日本全權の腰を挫いたことに因由するものであつた。いま又、國內の對聯盟態度に、かゝる弱音の夾雜物があつては、聯盟をますます増長させ、それと反對に我が全權の闘争力を弱化することになる。

こゝにおいて、我が國一部の強硬論者は猛然と起つて、聯盟脱退の輿論統一に奮闘した。

なかんづく、當時軍務局の軍事課にあつた鈴木貞一中佐（現陸軍中將、企畫院總裁）や、關東軍參謀長であつた小磯國昭少將（現陸軍大將、滿洲移住協會理事長）は、先頭に立つて輿論の統一に努むると共に、聯盟脱退輿論の喚起に全力を注いで活躍した。

小磯參謀長は、滿洲における幾多の作戦に赫々たる武勳を樹てたばかりでなく、滿洲國育成の上に大きな功績をのこした人で、東洋の平和を確保するには、どうしても滿洲を支那から引放して、獨立國家として存立せしめねばならぬといふ信念を持つてゐたので、たとへ如何なる聯盟の

壓迫があらうとも、滿洲建國の目的を貫徹しなければならぬとしてゐた。

鈴木中佐は、軍略家として秀で、ゐるばかりでなく、青年將校時代から國家經濟について造詣がふかく、日本の武力、經濟力について十分の確信を持つてゐた。だから中佐は「日本は世界中でいちばん強い國だ」と言つてゐた。現在もさうであるが、……といふのは日本の武力、經濟力を知つてゐるばかりでなく、世界各國の武力、經濟力についても十分に調査研究してゐるからその結論が斯く言はしめるのであつた。

なほ、松岡全權の隨員としてジュネーヴに在る建川、石原兩氏へは、鈴木、小磯氏等が、絶えずこれを激勵して聯盟脱退へ拍車をかけた。

當時の陸軍大臣荒木貞夫大將、外務大臣内田康哉伯が、鈴木、小磯氏等の聯盟脱退説を當然の措置として大いに力を藉したことは、いよ／＼本運動を軌道に乗せることになつた。

果して、澎湃たる聯盟脱退の輿論が日滿兩國を席卷した。

この空氣は、直ちに聯盟會議に反映し、その主腦者等は非常に成行きを憂慮したが、あくまで



日本を見縊つた彼等は、これは日本の示威運動だぐらゐに考へ、それに聯盟に依存してその存立を完うしようとする弱小國や自治領などの代表は、結束して勸告書支持に努めたので、聯盟の空氣は依然として險惡をつゞけ、二月二十四日勸告案の表決が行はるゝことになつた。

### 姐 上 の 滿 洲 國

滿洲國の運命を姐上にした勸告案採擇の可否を決する聯盟總會は、二十四日に開かれた。

世界各國の新聞社や通信社は、特派員を送つて、最大漏さずこの會議の模様を速報せしめた。松岡全權は、その表決に先だつて、勸告案に對する左のやうな演説を行つた。

日本代表は、既に十九國委員會の作成せる報告案に同意し難く、従つてこれを受諾し得ざる旨を總會に通告した。

報告書全體を通じて感知しうる一つの顯著なる事實は、十九人會議が、極東の實際的情勢と、

比類なき且つ戰慄すべき情勢の只中にある日本の困難なる立場と、日本をして従來の行動を執るの已むなきに至らしめたその最終的目的とを認識しなかつたことである。

極東における紛議の根本原因は、支那の無法律的國情と、その隣國への義務を承認せずして、あくまで自己の意志のみを行はんとする非望これである。支那は今日まで永い間、獨立國としての國際義務を怠つてきて居り、日本はその最も近い隣國として、此の點で最も多大の損害を蒙つてきた。

而して滿洲のみが、昨年まで支那の名目のみの主權の下に支那本土と一種の接觸と聯絡を持つことにより、支那の一部分として残つてゐたものである。

滿洲が、完全に支那の主權下に在つたといふが如きは、實際的且つ歴史的事實に對する歪曲である。今やこの地方は支那より離れ、獨立國となつた。(中略)

日本が認めてゐる滿洲の重大性については、更めて詳説する必要を予は認めない。總會はもはや同地方における日本の經濟的、政治的必要を知悉しゐるべき筈である。



しかし予は、この重大時機において、今一度諸君の注意を喚起したい。即ち日本は滿洲において二回の戦争をなし、しかもその一つにおいては、日本國民の存立を賭したのである。(中略)予は、この機關(聯盟)に對し、事實を認識し、將來の理想を直視せんことを乞ふものである。予は諸卿に對し、諸卿がわれわれの言に基いて、われわれを取扱ひ、且つ信頼せられんことを願ふものである。このわれわれの要望を拒否することは、大なる過誤となるであらう。予は、この報告を採擇せざらんことを要請するものである。予は、いよく採擇の表決が行はれた。

已に大勢は決してゐたが、その結果は賛成——即ちリットン報告書に基く勸告案を可とするもの四十二、これに對する反對は日本一國のみで、タイ一國が棄權した。タイの棄權はむろん日本に好意を表するものであつたが、結局四十二對一で滿洲國の獨立を否定する不當なる勸告案が採決されたのである。

### 勇斷、聯盟を脱退

日本及び滿洲國は、この不當なる國際聯盟の措置を甘受すべきであらうか。否、否、斷乎としてこれを拒否すべきである。そしてそれを拒否するたゞ一つの途としては、聯盟脱退が残されてゐるだけだ。

即ち、松岡全權は總會の席上で堂々として最後の宣言演説をなし、決然として彼等と袂を分つた。松岡全權のこの水際だつた宣言演説と、會場を睥睨して、全世界の代表に薄氣味悪い戦慄を感じしめた堂々たる態度こそは、實にその背後からこれを支持し、激勵した全國民の沸ぎる血潮が、脈々として彼の體内へ浸透したことに因るのだ。

かくて我が全權及び隨員は、四十二對一の量的表決には負けたが、精神的には凱旋將軍にひとしい氣持で引きあげた。國民も亦、これを凱旋將軍と變らない態度で歓迎した。

一方、日本政府においては、正式な聯盟脱退の準備に着手し、三月二十七日の樞密院本會議に



において、全國一致をもつて御諮詢案が可決された。そこで政府は直ちに聯盟脱退の通告を、聯盟事務總長ドラモンドに提出したのである。

この日、畏くも 天皇陛下には、左の如く國際聯盟脱退に關する詔書を渙發あらせられ、以て大日本帝國の嚮ふところの大方針を御示しあそばされた。

### 詔書

朕惟フニ曩ニ世界ノ平和克復シテ國際聯盟ノ成立スルヤ皇考之ヲ憐ヒテ帝國ノ參加ヲ命シタマヒ朕亦遺緒ヲ繼承シテ苟モ懈ラス前後十有三年其ノ協力ニ終始セリ  
 今次滿洲國ノ新興ニ當リ帝國ハ其ノ獨立ヲ尊重シ健全ナル發達ヲ促スヲ以テ東亞ノ禍根ヲ除キ世界ノ平和ヲ保ツノ基ナリト爲ス然ルニ不幸ニシテ聯盟ノ所見之ト背馳スルモノアリ朕乃チ政

府ヲシテ慎重審議遂ニ聯盟ヲ離脱スルノ措置ヲ採ラシムルニ至レリ

然リト雖國際平和ノ確立ハ朕常ニ之ヲ冀求シテ止マス是ヲ以テ平和各般ノ企圖ハ向後亦協力シテ渝ルナシ今ヤ聯盟ト手ヲ分チ帝國ノ所信ニ是レ從フト雖固ヨリ東亞ニ偏シテ友邦ノ誼ヲ疎カニスルモノニアラス愈信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スルハ夙夜朕カ念トスル所ナリ

方今列國ハ稀有ノ世變ニ際會シ帝國亦非常ノ時艱ニ遭遇ス是レ正ニ舉國振張ノ秋ナリ爾臣民克ク朕カ意ヲ體シ文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ衆庶各其ノ業務ニ淬勵シ嚮ノ所正ヲ履ミ行フ所中ヲ執リ協贊邁往以テ此ノ世局ニ處シ進ミテ皇祖考ノ聖猷ヲ翼成シ普ク人類ノ福祉ニ貢獻セムコトヲ期セヨ

### 御名御璽

昭和八年三月二十七日

各 大 臣 副 署



なほ、我が外務大臣の名において、國際聯盟事務總長に對して電報を以て通告した聯盟脱退の通告文は左のごときものであつた。

### 通 告 書

帝國政府は東洋の平和を確保し延いて世界の平和に貢獻せんとする帝國の國是が、各國間の平和安寧を企圖する國際聯盟の使命と其の精神を同じうすることを認め、過去十有三年に亙り原聯盟國として又常任理事國として此の崇高なる目的の達成に協力來しりたるを欣快とするものなり。而して其の間帝國が常に他の如何なる國にも劣らざる熱成を以て聯盟の事業に參畫せるは、嚴として動かすべからざる事跡なると同時に、帝國政府は現下國際社會の情勢に鑑み、世界諸地方に於ける平和の維持を計らんが爲には此等各地方の現實の事態に即して聯盟規約の運用を行ふを要し、且斯の如き公正なる方針に則り初て聯盟が其の使命を全うし其の權威の増進を期し得べきを確信せり。

昭和六年九月日支事件の聯盟付託を見るや、帝國政府は終始右確信に基き聯盟の諸會議其の他の機會に於て聯盟が本事件を處理するに公正妥當なる方法を以てし、眞に東洋平和の増進に寄與すると共に其の威信を顯揚せんが爲には、同方面に於ける現實の事態を的確に把握し該事態に適應して規約の運用を爲すの肝要なるを提唱し、就中支那が完全なる統一國家に非ずして其の國內事情及國際關係は複雑難澁を極め變則、例外の特異性に富めること、從て一般國際關係の規準たる國際法の諸原則及慣例は支那に付ては之が適用に關し著しき變更を加へられ、其の結果現に特殊且異常なる國際慣行成立し居れることを考慮に入れるの絶對に必要なる旨力説強調し來れり。

然るに過去十七箇月間聯盟に於ける審議の經過に徴するに、多數聯盟國は東洋に於ける現實の事態を把握せざるか又は之に直面して正當なる考慮を拂はざるのみならず、聯盟規約其の他の諸條約及國際法の諸原則の適用殊に其の解釋に付、帝國と此等聯盟國との間に屢重大なる意見の相違あること明かとなれり。其の結果本年二月二十四日臨時總會の採擇せる報告書は、帝



國が東洋の平和を確保せんとする外何等異圖なきの精神を顧みざると同時に、事實の認定及之に基く論斷に於て甚しき誤謬に陥れり。就中九月十八日事件當時及其の後に於る日本軍の行動を以て自衛權の發動に非ずと憶斷し、又同事件前の緊張狀態及事件後に於ける事態の悪化が支那側の全責任に屬するを看過し、爲に東洋の政局に新なる紛糾の因を作れる一方、滿洲國成立の真相を無視し、且同國を承認せる帝國の立場を否認し、東洋に於ける事態安定の基礎を破壊せんとするものなり。殊に其の勸告中に掲げられたる條件が東洋の康寧確保に何等貢獻し得ざるは、本年二月二十五日帝國政府陳述書に詳述せる所なり。

之を要するに多數聯盟國は日支事件の處理に當り、現實に平和を確保するよりは適用不能なる方式の尊重を以て一層重要なりとし、又將來に於ける紛争の禍根を爰除するよりは架空的な理論の擁護を以て一段貴重なりとせるものと見るの外なく、他面此等聯盟國と帝國との間に規約其の他の條約の解釋に付重大なる意見の相違あること前記の如くなるを以て、茲に帝國政府は平和維持の方策殊に東洋平和確立の根本方針に付聯盟と全然其の所信を異にすることを確

認せり。仍て帝國政府は此の上聯盟、協力するの餘地なきを信じ、聯盟規約第一條第三項に基き帝國が國際聯盟より脱退することを通告するものなり。

### 帝國脱退後の聯盟

日本の國際聯盟脱退は、聯盟それ自身の鼎の輕重を問うたばかりでなく、全世界に對して巨彈を浴びせたものであつた。

即ち、聯盟はこれによつてその無能無力を暴露したばかりでなく、その存在さへ影の薄いものになつてきた。脱退當時は、日本も滿洲國も、聯盟が何等かの形において兩國に壓迫を加へ來るものと覺悟し、その時こそはこれに對處する最善最適の手段を以て當る用意をしてゐたが、彼等の無能無力は、遂に一指を染むること能はず、却つて日本の脱退によつて、うるさい問題が片付いたかの如くケロリとしてゐた。

抑もこの國際聯盟なるものは、第一次世界大戰後、米國大統領のウィルソンが普頭取となつて



創設したもので、その主要なる眼目は、英、米、佛を中心として世界舊秩序を確保せんとすることにあつて、そのためには新興國家の擡頭を抑へつけることに、これ努めた。

だから、日本の如く大戰後ますます國力の充實發展をした國家に對しては絶えず白眼視してゐた。況やその援助によつて、強大な新家國滿洲國が生れるといふことは、彼等にとつては大なる脅威であり、また聯盟の規約を蹂躪するものとして極力反對したものである。

だが、今や聯盟は日本の脱退と、滿洲國の旺盛なる成長とによつて完全にその權威を失墜するに至つた。換言すれば、舊秩序維持に固執せんとする國家群の落凋を示す第一歩であつた。

この意味において、滿洲事變及び滿洲建國は、實に世界轉換史の第一頁を描いたものであり、新世界建設の扉を開いた鍵鑰であつた。

果せるかな、新興國家獨逸は、國際聯盟の規約を無視して、第一次大戰によつて失つた領土の回収に活潑なる動きを展開して遂に聯盟を脱退し、つゞいて第一次大戰後の平和會議において、パンを求めて石を與へられた形となり、不平滿々であつた、伊太利は、エチオピアに出兵して聯

盟の壓迫を受くるや、これまた敢然として聯盟を脱退するに至つた。しかもこれ皆、日本の轍を踏んだものである。

もし、あの時日本が聯盟を脱退せずして、その勸告案に聽從してゐたならば、聯盟はますますその暴威を逞うし、事如に新興國家群——なかんづく今日の樞軸新國群を彈壓したであらう。そして結果、こんにちの獨伊の輝しい躍進も、さらに大東亞戰爭の雄渾無比なる大戰果も期すことも出来なかつたであらう。

われわれは、茲に建國十周年を迎へた雄々しい滿洲帝國の成長ぶりを見るにつけ、當時國際聯盟脱退のために奮闘した先覺諸氏に深甚の感謝と敬意を表すべきである。



## 大和民族の大陸移動

### 建國に點睛せる開拓民

滿洲開拓移民は、龍を描いて點睛するやうな意義を有するものである。

初めて滿洲移民を提唱したのは、兒玉源太郎伯であつた。次いで小村壽太郎侯、後藤新平伯がまたこれを唱へ、その實行に移したのであつた。

兒玉伯や小村侯の滿洲移民の根據は、日露戦争に大捷を博した日本も、將來また日露の紛争が起るかもしれない。その際、滿洲に多數の日本民族が定着してをれば、露國は戦争を挑むやうなことをせず、また開戦しても滿洲の各地に定着した日本人が居れば、戦局は日本側にきはめて有利に展開するといふ主として國防上の見地に基いたものであつた。

後藤伯の論據は、主として經濟的優位を確保することにあつたが、しかもこの三人とも、日露

戦争によつて獲得した南滿洲鐵道を中心としての移民論であつた。

こんにち、北滿の奥深くどしどしと大群の開拓移民が繰込みつゝあるのは、實に滿洲建國以後のことであつて、これをこゝまで導いたのは實に東宮鐵男大佐と、加藤完治氏である。

東宮大佐は、滿洲事變前後に滿洲にあつたが、その頃は陸軍大尉としてある要務に服してゐた。

東宮大佐は、いよゝ建國運動が軌道に乗つてくると、滿洲國の健全なる發達のためには、どうしても日本人が大量に移住し、單なる移民でなく、滿洲全民族の指導者的立場を確立しなくてはならぬ。そのためには滿洲に骨を埋め、さらにその子孫もまた滿洲の土となる覺悟をもつて定着する開拓民を移植する必要がある。そしてそれは一方において日本の人口問題や農村問題を解決する新たな途であると考え、これを要路に向つて力説したのであつた。

即ち、日本は平時において年々百萬内外の人口が自然増加をなしつゝあるが、國土狭小にして且つ天然資源に乏しいため、これからいろゝの社會問題が起つてゐる。殊に、農村はこの人口



増殖による影響を受けて甚しく窮乏してゐる。

二一〇

日本全国の耕地總面積は六百萬町であるが農家の總戸数は五百六十萬戸に及び、一戸當りの平均耕作地面積は、僅に一町歩にすぎない。しかもこれは平均数であつて、その實情は五反歩未満の耕作者が約百九十萬戸に達し、全農家の三割四分を占めてゐる。

そして、かゝる小農の家庭ほど大體において家族が多く、そのため生活はますます窮乏に陥るばかりである。この結果保健、衛生、教育などの上に憂慮すべき現象を呈するにいたる。

由來、農は我が國の國本とされ、また國防の第一線に立つ軍隊の温床とされてゐる。その農村がかくの如き状態では人道の上からいつても、國防上からいつても、將又國家興隆の上から見ても由々しい問題である。

農民として立派な資格を持つてゐる農家の二男坊三男坊といふやうな人々は、耕すに土地なく食ふに食なきため、餘儀なく鋤を棄て、都會へ出るといふ状態であつた。

しかも、眼を轉じて滿洲の新天地を眺むれば、沃野千里漠々として展げ、ある年數は肥料を施

さずしても五穀豐穰を期すことができるのである。

即ち、狭小なる日本の國土に寸地尺土を求めて汲々たらんよりは、寧ろ滿洲の新天地に赴いて新運命を開拓すると共に、それが國防上最も重要な役割を果すのであるから、一舉兩得にも三得にもなる。

東宮大佐は、この見地から要路の人々に武装自衛移民の計畫を説いたのであつた。

むろん、これに反對するやうな人は一人もなかつた。滿洲國側においても大いに賛成した。

一部では、日本の開拓民が大量移住することになれば、滿洲の農民生生活を壓迫することになりはしないかと憂慮する向もあつたが、これは單なる杞憂にすぎない。

何となれば、滿洲國には現在四千萬町歩の可耕地があるが、その既耕地はその半數の二千萬町歩にすぎず、日本開拓民は彼等の既耕地には一指も染めずに未墾地を開拓するのである。そしてこの既耕地の二千萬町歩といふものは、約四千萬人の滿洲人が幾千年の昔から原始的農法によつて耕作し、それ以上の耕作は不可能の状態にあるから、決して日滿兩國民の農耕の上に摩擦を生ず

二一一



ることではないのである。

一一一

## 武装移民時代

當局をして、開拓移民の決意を促進せしめたものは、東宮大佐のほかに加藤完治氏である。

加藤氏が、こゝにいたるまでにはいろ／＼の挿話がある。氏は曾て郷里山形縣の僻村に農村道場を開き、専ら農本主義による農民魂の鼓吹につとめてゐたが、ある時、立派な農民魂を修得して卒業期を迎へんとする四人の生徒が、加藤氏を教室に訪ねて來た。

彼等は、きはめて嚴肅な態度で、

「私達は先生から立派な農民魂を授けてもらひましたが、私共はみんな小作人の倅ですから、折角この道場で修得しました農民魂も耕すべき田畑がないので生かしようがありません。何かよい方法はありませんまいか」と訴へた。

これには、さすがの加藤氏もぎやふんと參つた。

(なるほど、自分の農民魂は耕す田畑を所有する者を前提として指導してゐた。しかし、農村には田畑を持たない者が澤山ある。農民を救ふにはこれに耕すべき田畑を與へるのが先決問題である。あゝ、何といふ迂濶であつたらう)

農民の救済をもつてその生命としてゐる加藤氏だけに、この四人の訴へはいたく氏の胸を衝つた。

(よしッ！ 俺はこれから先づ農民に土地を與へることに努力しよう)

加藤氏は、驕然と覺つて、それから一千圓ばかりの金を工夫し、田畑を持たぬ農家の青年數十名を引きつれて朝鮮に渡つた。朝鮮には可耕地が相當に残つてゐるので、これを開拓するためである。

朝鮮總督府は、その意氣を壯なりとし、可なり廣い不毛の地を讓渡してくれた。

加藤氏は、直ちにその不毛の地に堀立小屋を建て、自ら陣頭に立つて粒々辛苦、不毛の地をして立派な耕地となし、數年後には遂に自給自足するまでに發展した。

一一三



これといふのも、引卒していった青年たちが、農民道場で鍛へあげた不拔の農民魂と、耕す土地を得た喜びによつて、勇躍農耕にあたる賜であつた。

(やはり、農民には土地を與へなくてはならぬ、この愛する大地から總ての道德と、勇氣と、情操とが生れるのだ)

加藤氏は、黄金色の波打つ廣漠たる稻田を打眺めながら、つく／＼と感じたのであつた。

ちやうど其の時滿洲事變が起り、やがて日滿一如の滿洲國が建設されるといふ話を聞いた加藤氏は、

(あの滿洲の一望涯なき大沃野こそ、日本農民、いや豐葦原の大和民族が大移動をして開墾すべき絶好の土地である。そしてこれは取りもなほさず民族融和、日滿共榮の唯一の途である)と考へた。

この結論に達するともう矢も楯もない。加藤氏は直ちに奉天に赴いて、關東軍參謀に會つた。そして加藤氏は、上述のやうな意見を熱心に説いた。

關東軍參謀は、すでに東宮大尉からも同様な意見を聞いてゐた際ではあるし、一も二もなく賛成し、その具體化に力を添へた。

勿論、大和民族の滿洲大移動については、他にも深甚の考慮を有し、そしてその具體化について努力した人も少くないが、これが急速實現の動因をなしたものは、何といつても東宮大佐と加藤完治氏である。

### 加藤完治氏の奮闘

加藤、東宮氏等の提案に基く滿洲開拓事業に關する政府の諸方策は、事變の翌年昭和七年一月奉天における第一回移民會議において慎重に検討された。むろん、その結論は積極的に大和民族の滿洲移動を行ふことを是とせるものであつた。

加藤完治は、これに先だつて早くも昭和六年、事變勃發直後の血腥い戦跡、奉天の北大營に數十名の日本青年を引きつれて乗込み、開拓の先驅者たる活動を開始したのであつた。



翌昭和七年(大同元年)十月には、いよいよ第一次武装移民として佳木斯屯墾の大隊四百九十二名を送ることになり、加藤氏の指揮する奉天開拓の青年たちを加へて隊を組織し、哈爾濱から船で松花江を下ることになった。

東宮大佐(当時大尉)は、これが總指揮官としていろ／＼と面倒を見た。ところが、その途中で匪賊の襲撃をうけて包圍をうけて苦戦し、目的地永豊鎮まで到着するのに三ヶ月半もかゝつた。

しかも、その入植後の生活は全く苦闘そのもので、あるひは匪賊の不意討ちと闘ひ、あるひは疫病に襲はれ、あるひは土と取組んで、經營慘澹たるものであつた。

だが、開拓の勇士たちは少しもこれに屈することなく、ます／＼勇氣を發揮して、萬難を排しひたすら使命達成に邁進した。

この間、東宮氏と加藤氏は絶えず開拓士たちを鼓舞激励すると同時にこれを慰藉し、指導する一方、當局に對して今後の方策について献策した。

眞摯敢闘の努力に對して酬いられぬ筈がなく、永豊鎮の武装移民團は漸次好調に赴き、その名

も彌榮村と改め、第一回武装移民團の範を示すにいたつた。

次いで昭和八年、第二次移民團が彌榮村の南方、湖南營に入つた。

これまた屢々匪賊の襲撃をうけ、數十日も包圍されて非常に苦戦したが、團員は協力一致して善戦し、遂にこれを撃破して民族協和の千振村を築くにいたつた。

昭和九年には第三次武装移民團が緩稜に入植した。この頃は日滿兩軍の治安工作が進捗して、前二者のやうな匪襲をうけることはなかつたが、それでも決して油断はできなかつた。けれども自らその大使命を自覺した拓士たちの集團であるからこれに屈することなく努力し、こんにちの瑞穂村を築きあげた。

この第一次から第三次までの移民を「武装移民の時代」と稱する。

彌榮村、千振村、瑞穂村はこんにち教育、衛生、警備、經濟等の諸機關を完備し、民族協和の平和な樂土を現出して、滿洲移民の師表となつてゐる。



## 百萬戸五百萬人計畫

「武装移民時代」は、また「試験移民時代」でもあつた。

しかもこれが完全に成功したので、當局でもいよいよ本格的に移民を行ふことになり、昭和十年には日本内地に滿洲移住協會が設立されて専ら募集宣傳に努め、さらにの滿洲現地機關として現在の滿洲拓植公社の前身たる植滿洲拓株式會社が設立されて、開拓民の指導助成にあたることになつた。

この年、第四次が二集團、翌十一年には第五次が四集團入植し、こんにちの東安省密山縣における移民村の繁榮を見るにいたつた。この第四次、第五次も亦試験移民に準ずるものであつた。

著者は、昭和十四年の夏のこの密山縣の移民村を訪問したが、聞きしに優る整備と繁榮を呈し、すでに自給自足を通りこして、堂々たる收益時代に這入つてゐるのを見、非常に心強く感じたのであつた。

日滿兩國政府は、以上合計九ヶの開拓移民の成功せる貴重な體驗に基き、いよいよ開拓農村の大量送出——即ち大和民族の大移動を重要國策の一として採りあげることに決定した。

この計畫は、昭和十二年から向ふ二十ヶ年間に百萬戸（一戸五人當りと見て）五百萬人の日本内地農民を滿洲國に移動せしむることを目標としたものである。そしてこれは大體四期に分けて送出するもので、その内譯は左の通りである。

第一期	昭和十一年度——昭和十六年度	十萬戸
第二期	昭和十七年度——昭和二十一年度	二十萬戸
第三期	昭和二十二年度——昭和二十六年度	三十萬戸
第四期	昭和二十七年度——昭和三十一年度	三十萬戸

なほ、このほかに昭和十三年度から新たに滿蒙開拓青少年義勇隊を、内地から毎年三萬人ぐらゐづゝ送出することになり、已に豫定どほり活潑なる活動を開始し、滿洲移民の若櫻として、いたる處に噴々たる好評を博してゐる。



百萬戸五百萬人の開拓移民の上から滿洲國の將來を卜してみると、二十年後における滿洲國の人口は五千萬人になると推定されるが、日本移民五百萬人はその一割にすぎず、絶対に兩國人の耕地に關する摩擦相剋が起る筈がなく、むしろこれによつてますます民族協和と、共存共榮の實をあぐることになり、滿洲國人の文化も著しく向上するものと見られる。

さらにこれを内地について見れば、日本農家戸數約五百六十萬戸の約二割五分を占むる五反歩未滿の農家の凡そ半數は滿洲國に移住することになり、曾て加藤完治氏に向つて訴へた農村青年の言葉——即ち「折角農民魂は修得したが、これを實地に行ふ田畑がない」といふ事實は解消されることになり、移住する農民も榮え、残る内地農民もまた生活の餘裕を生ずることになる。

### 開拓の基本決定

開拓移民の重要性に鑑み、日滿兩國政府の當事者は、昭和十四年(康德六年)の一月から十二月にかけて、新京及び東京において會議を開き、滿洲國側の作製による素案を中心として慎重審議

した結果、左のやうな基本要綱を決定し、直ちにこれを公表するにいたつた。

今後、これを基本として一切の移民政策が行はれるもので、極めて重大な意義を有するものである。

#### ◇開拓政策基本要綱

##### 基 本 方 針

滿洲國開拓政策は、日滿兩國の一體的重要國策として東亞新秩序建設のための道義的新大陸政策の據點を培養確立するを目的とし、特に日本内地人開拓民を中核として、各種開拓民並に原住民等の調和を圖り、日滿不可分の關係の鞏化、民族協和の達成、國防力の増強及び産業の振興を期し、兼て農村の更生發展に資するものとす。

##### 基 本 要 領

一、基本方針に則り、日滿兩國各分擔部門並に協力部門の各責任範圍を明かならしむると共に、



その間一貫せる脈絡を保持し、以て日滿兩國を貫く日滿開拓政策の統制ある發展並に圓滑なる實施を期するものとす。

二、開拓民の種別概ね左の通りとす。

(1) 日本内地人(朝鮮人は之に準ず)

イ、開拓農民

ロ、半農的開拓民(林業、牧畜、漁業等)

ハ、商、工、鑛業其他の開拓民

ニ、開拓青年義勇隊

(2) 原住民

イ、國內開拓移動原住民

ロ、開拓民移住に伴ふ輔道原住民

なほ、基本要綱は二十六項から成つてゐるが、そのうちから摘記してみると、

◇日本内地人開拓民は、差當り原則として北滿方面を主とするのほか全滿における交通産業開發上の重要地點に定着せしむるも理想としては廣く分布し、各地における民族協和の中核分子たらしむることを期す。

◇開拓地用地の整備に關しては、原則として未利用地開發主義により之を國營とす。

◇團又は開拓農家に配分せる土地に對しては、自由なる私權制度によるの適當ならざるに鑑み適切なる規制を設け、營農の根據を確固にし、以て開拓目的に即應する理想的農村の建設を庶幾す。

◇開拓用地は、農民の特性に鑑み、土地の永代世襲確保を圖ると共に、その所有形態を定む。

◇開拓民の衣食住、健保及び生活様式に關しては、大陸的新環境に即應する様適切なる方途を講ず。

◇醫療に關しては、各地醫療機關を整備し、その經營を合理化し、開拓民醫療の萬全と、醫療費負擔の輕減を期すものとす。



◇開拓農民移住後、その經濟的基礎確立に至るまでの間において死亡等の場合、その遺族等を救済するため共済制度を設くるものとす。

◇原住民の國內開拓移動に關しては、集約立農業經營の指導と相俟ち、體系的計畫の下に之を輔導統制す。

◇滿蒙開拓青少年義勇隊については、日本における募集訓練より、現地訓練及び定着にいたるまで、脈絡一貫せる指導精神を保持し、内地訓練と現地訓練を實施す。

◇負債のため移住困難なる開拓希望者に對しては、その負債整理計畫の樹立を指導すると共に極力負債の條件緩和及び財産の有利なる處分の斡旋等に努め、以て移住を容易ならしむるものとす。

◇開拓民の未招致家族に對しては、之が生活維持に努しむるも尙生活を維持すること能はざる者に對しては扶養の方法を講じ、開拓民の不安を除去し、滿洲開拓政策の順調なる遂行に資するものとす。

◇旺盛なる開拓思想を培養すると共に、開拓地における人口構成の階調的進展を期するため、汎く女性一般に對し積極的進出を鼓吹すべき有効適切なる施設を行ふものとす。  
◇開拓民に對する金融は、豊富低廉且敏速を圖るものとす。

かくの如くして、昭和十二年から昭和十五年に（康德七年）にかけて入殖した内地人及び朝鮮人の開拓民は、昭和十五年末現在において、

◇内地人集團開拓移民  
團數 一五一 戶數 一七、九四九 人口 三一、五六四

◇内地人集合開拓移民  
團數 一一五 戶數 三、五七八 人口 一〇、八二八

◇朝鮮人開拓民  
戶數 一、八三一 人口 七、一五九



といふ夥しい數に達し、このほかに内地から鐵道自警隊として四四〇戸、一、四四八人が事變直後に入殖したが、現在では各部門とも更に著しい増加を呈してゐる。

### 開拓移民の若櫻(青少年義勇隊)

開拓移民の若櫻として、青少年義勇隊が滿洲のいたる處において噴々たる好評を博してゐることは前述のとほりであるが、これは内地及び現地において、心ゆくまでに訓練された後、はじめてその職域に就くからである。

前示「基本要領」にあるとほり、滿蒙開拓青少年義勇軍は、内地及び現地において一應訓練されることになつてゐるが、内地における訓練所は滿洲移住協會が經營して加藤完治氏が主宰してゐるところの茨城縣内原にある滿蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所がそれである。

こゝへ入所する青少年は、大體十六歳から十九歳までの青少年で、この訓練所で二ヶ月乃至四ヶ月を訓練された後渡滿し、さらに現地において三年間適當なる訓練を受けるのである。

この内地訓練所は、昭和十三年度から開始されたが、開始後一ヶ年餘にして早くも三萬人の青少年を滿洲に送り、その後もこれに準じて送つてゐるから現在ではかなりの數に達してゐる。

内原訓練所は、水戸に近い内原の松原の中にあつて、日輪兵舎と稱する現地を形取つた圓形の堀立小屋が三、四十もあり、その中央の本部と稱せらるゝ一番大きな堀立小屋が加藤氏の居住兼事務室である。加藤氏は、義勇軍と一緒に朝から晩まで汗みどろになつて訓練にあたつてゐるがこのほかに自ら同所に國民高等學校を經營し、農本主義の教育を授けてゐる

今こそ、氏が若い頃から唱へ來たつた「農民魂」を遺憾なく發揮する時運に際會したのだ。氏の得意思ふべしだ。

農民魂を經とし、開拓者としての理想と技術を緯とする、これらの純眞な青少年たちが、大陸新政策の第一線に立つて活躍する時こそ、日滿一體の態勢はいよゝゝ強化されるのである。



## 噫!! 東宮大佐

われわれは、滿洲開拓移民の順調な發展を見るにつけ、日滿兩國のため衷心よりこれを慶ぶとともに、一抹の哀愁を禁じ得ざるものがある。

それは、滿洲開拓の推進力であり、開拓民の育ての親であつた東宮鐵男氏にこの盛況を見ることができぬことだ。

東宮氏は、支那事變勃發當時は陸軍中佐であつたが、事變勃發と同時に出征して、昭和十二年十一月四日の杭州灣敵前上陸部隊には、東宮部隊長として参加した。

上陸後五日目、廣陳鎮附近の敵のトーチカ奪取の命令を受け、その指揮官となつて陣頭に立つことになつた。

東宮大佐は、上陸後少し腹を痛めてゐたが、いよいよ決死隊として敵中に躍りこむかと思ふと愉快でならなかつた。同時に、部下たちを励ますため、その夜大佐得意の「東宮鍋」を拵えて門

出の祝盃を擧げた。

この「東宮鍋」といふのは、大佐獨得の料理で、鶏と野菜を鹽味だけでごつた煮にしたものが、自ら味加減を見るのであるから非常に甘いものであつた。何か愉快なことがあると、いつでもこれを拵えて會食することを楽しみにしたものだ。

「これは、博多の水焚きみたいなものでありますな」

部下が舌鼓を打ちながらかう言ふと、

「似て非なるものぢや、これには鹽以外は少しも調味料を使はんのぢや。天與の美味といふものだ。滿洲ではよくこれを食べたなア」

と、遠く北滿の空を偲ぶやうに、じつと盃を見詰めるのであつた。夜が明けて出發の時刻が來た。

その日の目的地である李家橋まで行くにはクリークを渡らねばならぬが、舟が一艘しかなかつたので、決死隊を編成し、東宮部隊長自らこれを指揮して一艘の扁舟に乗組んだ。



土民の話によると、この先には敵がゐないといふことだったが、可なり進んだ頃、突如、兩岸から敵が一齊射撃を浴びせた。

東宮部隊長は、直ちに水中に飛びこんで先頭に立ちながら一方の岸たどりつき、日本刀を振りかざして敵中に斬込むと、大勢の敵もこれに度膽を奪はれて、蜘蛛の子のごとく逃げうせたけれども、對岸の敵の射撃はますます猛烈となり、部下は相ついで殞れ、傷つき、東宮部隊長は彈丸のため兩方の肩を抉りとられた。

部下が、窪地に擔ぎこんで介抱すると、

「大事な時だ、俺にかまはず前進しろ」

と、きつとした口調で言つたが、次第に氣力が衰へはじめた。そして突如

「誰か、鉛筆と手帳を出せ」

と叫んだ。

部下が、右手に鉛筆を握らせて、手帖を手頃の場所に開くと、部隊長は徐ろに鉛筆を運んで、

嬉しさや

秋晴れの野に部下と共に

と書き終つて、靜かに眼を閉じた。

あゝ、英魂はかくて北滿のすがくしい秋晴れの野に飛んで行つたのであらう。

## 建國十年後の滿洲

人口千數百萬増加

十年の歳月は、無爲徒食の徒にとつては長いものであり、そして何物も遺さないが、生々潑刺として活動する者にとつては至つて短く、そしてその間大きな成績を擧げる。滿洲國は正にその後者に屬する。

凡そ世界の歴史において、建國後わづか十年にして、これだけの飛躍發展を遂げた國家は悉無



である。

これは要するに、天の時と、地の利と、人の和を得たことに因由するものであつて、換言すれば天意を體して眞摯なる努力を積んだ賜である。

その飛躍を最も雄辯に物語るものは人口の激増である。

即ち、建國前においては人口三千萬を有し、その國歌にさへも「人民三千萬」とあるが、康徳七年（昭和十五年）に於いて實施された國勢調査の結果によると、實に四千三百二十三萬三千九百五十四人に達してゐる。

人口の増加する原因は、いふまでもなくその國民が安居樂土によるものであつて、いかに滿洲國において善政が施されてゐるかを實證するものだ。

康徳七年といへば建國後九年目であつて、これを實に一ヶ年に百四十七萬餘人づゝの増加となつてゐる。我が國一ヶ年の人口の増加率は凡そ百萬人内外となり、世界各國の人口増加率に比して最も多いものとされてゐるが、滿洲國はさらにそれを越してゐる譯で、正に超々増加率である。

多年にわたつて、米英の桎梏の下に喘いでゐた南洋各地においては、却つて人口の減少するところがあり、あるひは増加しても遅々として極めて低率であつた。これは伸び／＼した氣持で生活することが出来なかつた反映である。むろん、堂々たる獨立國家たる滿洲國と、米英の屬領であつた南洋各地と比較するのは當を得ないのであるが、しかも人口増加率の上にかくの如き開きがあることは、善政と虐政が、いかに出産及び死亡の率の上に重大な影響を及ぼすかを證するものでなくて何であらう。

日滿兩國の二十ヶ年拓植計畫より見た滿洲國の人口は、その最終年度たる昭和三十一年度に五千萬人になる推算となつてゐるが、これまでの増加率から推せば、遙かにこれを凌駕して約八千萬人ぐらゐになるのではあるまいか。

何れにしても、この人口の増加率は滿洲帝國は勿論、不二一如の關係にある日本帝國のためにも亦最も慶賀すべきことである。

試みにこれを各都市についてみれば、首都新京は、建國前までは滿鐵附屬地及び商埠地、城内



（舊市街）の三區を合して十一萬であつたが、建國直後は十二、三萬となり、現在においては實に約五十六萬人に激増してゐる。

市の區域も、人口の増加に伴つて現在では東京市の七倍強、ロンドン市の一倍半弱にあたる四百三十七平方軒といふ龐大な地域となり、なほ人口は續々として増加しつゝある。

また、開拓移民の樞要地である牡丹江市の如きも、建國初頭までは僅に三千五百人の人口を有するに過ぎなかつたが、現在においてはその約六十倍の増加を示す盛況である。

その他、各都市とも著しい人口の増加を呈してゐるが、これは一面において民族協和の建國の精神に則つて、いかなる人種であらうと、滿洲國の發展強化に協力する者はこれを大いに歡迎することにも原因してゐる。

なほ、滿洲國の人口を各省別にみれば、

奉 天 省 一〇、三二五、三三〇人  
吉 林 省 五、八六五、〇二四人

熱 河 省 四、五五七、六七六人  
錦 州 省 四、三二二、二二九人  
濱 江 省 四、二二六、四一〇人

其の他二百萬人以上の省は北案省、安東省、龍江省であり、百萬人以上の省は三江省、興安省である。

なほ、主なる都市の人口は

奉 天 市 一、一三五、八〇一人  
哈 爾 濱 市 六六一、九八四人  
新 京 市 五五四、二〇二人

といふ状態であるが、年々急速な増加を示してゐる。

この人口の大増加は、前述のやうに滿洲國民が安居樂土による生活の餘裕や衛生保健の設備が完備してきたことなどが主たる原因になつてゐるが、さらに一つの大きな原因として見のがして



ならぬことは、中華民國の民衆が、滿洲國の善政を慕つて、さかんに移住しつゝあることである。しかし、この漢民族の大移住については、當局者としては、あらゆる角度より十分研究し、そして適正なる對策を講ずべきではあるまいか。

### 滿洲國を承認せる友邦

建國當時、國際聯盟は「もし滿洲國を承認するやうな國家に對しては重壓を加へるからその覺悟であらう」といふやうな恫喝的態度を露骨に示したものであつた。

建國直後の昭和七年四月十一日に開かれた國際聯盟總會の決議文には

聯盟各國ハ、聯盟規約又ハ不戰條約ト相容レザル方法ニヨツテ發生シタル何等ノ事態、條約又ハ協定ヲ承認スベカラザルモノトス

といふ文字を挿入して、滿洲國を承認せんとする國家を牽制した。この決議文作製についてはアメリカの國務卿スチムソンが蔭で大いに活躍した。

けれども、滿洲國と特殊の關係を有する日本は、そんな決議などに頓着することなく、いよいよ滿洲國を承認することに廟議決定し、大同元年(昭和七年)八月二十日、武藤大將を全權大使として派遣し、同年九月十五日、新京の執政府において滿洲國國務總理鄭孝胥氏との間に、兩國永遠の友好を確保する有名な日滿議定書を作成し、共に署名調印を了して、こゝに滿洲國を正式に承認するに至つた。

次いで、主として樞軸國側によつて續々と承認されるに至つたが、最初から現在まで承認せる友邦は次の通りである。

日	本	(大同元年(昭和七年)九月十五日)
サルバドル		(康德元年(昭和九年)三月三日)
イタリヤ		(康德四年十一月廿九日)
スペイン		(康德四年十二月二日)
ドイツ		(康德五年五月十二日)



- ハンガリー (康徳六年一月十日)
- スロヴァキア (康徳六年六月一日)
- 中華 民國 (康徳七年十一月三十日)
- ルーマニア (康徳七年十二月一日)
- ブルガリヤ (康徳八年五月十四日)
- フィンランド (康徳八年七月十九日)
- タイ (康徳八年八月五日)
- デンマーク (康徳八年八月十三日)

なほこの外に舊ポーランドが康徳五年十月に承認して居り、ドミニカ共和国元首からは康徳元年に親書が来てをり、ローマ法王廳は滿洲國を獨立布教區として、康徳元年法王廳代表を任命しまたソ聯は日ソ中立條約締結(康徳八年四月)にあたり、事實上滿洲國を承認したことになつてゐる。

爾餘の國家といへども、滿洲國を承認したいのはやま／＼であるが、米英の睨みに恐れて躊躇してゐるものが多い。けれども、大東亞戦争による米英の大敗は、已に彼等の睨みが利かなくなつてきたので、今後なほ續々と承認する國家が現はれるものと見てよい。

### 各 部 面 の 躍 進

このほか、各局面にわたつて一齊に飛躍伸展してゐるが、なかんづく最も目星しいものは交通機關の發達である。

### 鐵 道

建國後、鐵道政策に最も重きをおいて經濟開發、國防安固、治安維持を目標として銳意その建設に努力した結果、建國當時の鐵道線路は鐵道六千二百餘軒、輕鐵二百三十軒、計六千五百軒であつたのが、康徳六年十月一日現在の鐵道總局所管鐵道は合計一萬七百八十二・二軒、私設鐵道



營業線百十九・三杆、森林鐵道八百七十六・三杆に達した。

二四〇

この諸鐵道の經費並に新設鐵道の工事請負は滿鐵に委任したのであるが、滿鐵はその任務の重大なるに鑑み、鐵道總局を設けて、大同二年三月以來、一ヶ年平均六百餘杆の進捗ぶりを示してその使命達成に邁進したのであつた。

試みに、建國前の滿洲地圖と、現在の滿洲地圖とを展げて、その鐵道線路を見ると、建國前の鐵道線路が極めて疎らで、その主たるものは、哈爾濱から大連にいたる幹線と、綏芬河から滿洲里にいたる東支鐵道、奉天から山海關にいたる奉山線、奉天から安東縣にいたる奉安線ぐらゐのものであつたが、現在では北は黑龍江畔の黒河、ウスリー河畔の虎頭、東はソ滿國境の東寧とソ滿國境に開通し、さらに牡丹江から佳木斯を経て綏化、北安、寧年、齊齊哈爾をつなぐ北滿大横斷鐵道奉天から承德を経て滿華國境古北口にいたる西部滿洲の横斷鐵道、四平街から中部滿洲を南下して梅河口を経、鴨綠江畔の輯安にいたる線、北鮮の清津及び雄基から、圖們を経、吉林を経て新京に直行する線、圖們から牡丹江へ出る新線等々、まるで蜘蛛の巣のやうに國鐵、社鐵の

線路が張りまはされてゐる。

そして、これらの各線は經濟、國防、治安、文化の上に計り知れない寄與貢獻をなしつつある。

なほ、滿洲國の鐵道政策は、將來その總延長を二萬五千杆とするのであるから、その實現の曉は今日の約一倍半に達することになる。その盛觀想ふべしだ。

## 治 安

滿洲國の治安を紊す者は、主として張學良軍の敗殘兵や、舊來からゐる馬賊などであつた。

著者は、大同元年の秋滿洲を訪問して東京へ歸つた際、放送局からの依頼で「滿洲の匪賊」といふ題で放送したが、その時は「現在なほ滿洲には二十餘萬の匪賊がゐる」といふことを述べた。それほど、滿洲の各地になほ敗殘兵や馬賊が跋扈跳梁してゐた。しかも、事變直後には三十萬を數へてゐた。

それが何うであらう。建國十年目の今日では、僅に五百人足らずに減つてしまつた。これはい



ふまでもなく、日滿兩軍及び滿洲警察隊等の連続的な討伐によるものであるが、他の一面では前述のやうに交通機關の發達によつて、彼等の本據が脅かされるに至つたこと、さらに一つは、安居樂土の新國家が生れたので、何も命がけの匪賊などを働かなくても、いくらでも仕事があるので、改心して正業に就いた者、あるひは張學良の復活を夢みて、徒らな抗日をやつてゐたのが、却つて張學良の非を覺り、新國家の善政を謳歌するやうになつて、さらりと匪賊商賣をやめたことにも因る。

## 財 政

建國當時の滿洲國の豫算は、一億一千萬圓にすぎなかつたが、康德八年度は約二十倍の二十五億九千八百萬圓に激増してゐる。

日本でも、帝國議會が開設された當時は、一億圓足らずの豫算で、それを議員が多いの少いのと言つて騒いだが、今日では百數十億圓の豫算に飛躍したばかりでなく、これに匹敵する追加豫

算も悠々として賄つてゐる状態である。

なほ、滿洲建國當時の租稅收入は、九千九百萬圓であつたが、現在では三億八千四百六十萬圓に上つてゐる。

これは、要するに滿洲國の國力がそれだけ強化充實したことを如實に物語るものである。

## 産 業

滿洲國には、あらゆる天産資源が豊富であるが、支那政府は滿洲を東北の邊土として顧ることなく、また張家二代にわたる治政においても殆ど手をつくることなく、たゞ日本の資本による鐵道、炭鑛、製鐵等の事業がその目星しいものとして活躍してゐた。

建國後、各國の資本主義的産業家は、滿洲の資源に垂涎して、治安の立とともに大々の進出の態勢を示したが、滿洲國はその重要産業に對して統制主義をとり、修正資本主義立場の下に、自由競争によつて誘發さるゝ不可避的な弊害を防止することに努めた。



かくて康徳三年、この根本方針による産業五ヶ年計畫を樹て、生産力擴充にあたることになつたが、支那事變の勃發によつてこの計畫を全面的に修正して一段の強化を圖り、一面に康徳四年六月に特別會社法を制定公布して特殊會社及び、準特殊會社をして、各産業の開發に當らしめることになつた。

現在、特殊會社はその數三十八社に及び、公稱資本金十九億八千九百五十圓(拂込資本金十四億七千萬圓)に達し、準特殊會社はその數二十一社、公稱資本金四億六千四百三十二萬圓(拂込資本金三億七千八百三十三萬三千圓)に達してゐる。その會社は左の通りである。

特殊會社・準特殊會社一覽表

(康徳七年二月十五日現在)

特殊會社	會社名	公稱資本	拂込資本	代表者名	本店所在地
滿洲	棉花	一〇、〇〇〇	四、五〇〇	橫瀬花兒七	奉天
滿洲	計器	八、〇〇〇	三、五〇〇	松原梅太郎	新京
滿洲	火藥販賣	五〇〇	五〇〇	小柳津正藏	奉天
滿洲	生命保險	三、〇〇〇	一、五〇〇	高橋康順	新京
滿洲	林業	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	南正樹	新京
滿洲	鹽業	一五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	芝喜代二	新京
滿洲	鑛業開發	五〇、〇〇〇	二七、五〇〇	竹内徳亥	新京
奉天	造兵所	二五、〇〇〇	一四、八〇〇	三村友茂	奉天
滿洲	弘報協會	八、〇〇〇	四、六〇〇	森田久	新京
滿洲	圖書	八、〇〇〇	二、〇〇〇	石川正作	新京
滿洲	興業銀行	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	富田勇太郎	新京
滿洲	中央銀行	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	關潮洗	新京



滿洲映畫協會	五、〇〇〇	四、三七五	甘粕正彦	新京
滿鮮拓殖	一五、〇〇〇	七、五〇〇	二宮治重	新京
滿洲拓殖公社	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二宮治重	新京
滿洲合成燃料	五〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	尾形次郎	新京
滿洲鴨綠江水力發電	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	野口 遼	新京
滿洲 糧 穀	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	小平 權一	新京
滿洲油 化 工 業	二〇、〇〇〇	七、五〇〇	高橋 康順	新京
滿洲 房 產	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	謝 介 石	新京
滿洲重工業開發	四五〇、〇〇〇	四五〇、〇〇〇	鮎川 義介	新京
滿洲 炭 礦	三〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	同	新京
滿洲自動車製造	一〇〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	山本 惣治	新京
昭和製鋼所	二〇〇、〇〇〇	一七五、〇〇〇	小日山直登	鞍山

同和自動車工業	三〇、〇〇〇	一八、一〇〇	竹原 傳	奉天
滿洲輕金屬製造	八〇、〇〇〇	六五、〇〇〇	吉野 信次	撫順
滿洲電氣化學工業	三〇、〇〇〇	七、五〇〇	山崎 元幹	新京
滿洲 採 金	六〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	石川 留吉	新京
滿洲飛行機製造	一〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	鮎川 義介	奉天
滿洲硫安工業	五〇、〇〇〇	一二、五〇〇	南 正樹	新京
滿洲電信電話	一〇〇、〇〇〇	四三、一二五	廣瀨 壽助	新京
滿洲土地開發	二〇、〇〇〇	五、〇〇〇	梅野 實	新京
吉林人造石油	一〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	野口 遼	新京
滿洲特產專管公社	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	向坊盛一郎	新京
滿鐵穀粉管理	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	奥平 廣敏	新京
滿洲生活必需品	五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	島田 茂	新京



日滿商事	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	小川逸郎	新京
準特殊會社 滿洲電業	一六〇、〇〇〇	一二五、〇〇〇	韓雲階	新京
滿洲曹達	一六、〇〇〇	八、〇〇〇	西川虎吉	新京
滿洲航空	三〇、〇〇〇	二三、九八九	牧野正廸	奉天
大安汽船	三五〇	三五〇	倉田芳松	安東
本溪湖煤鐵	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	大崎新吉	本溪湖
大同酒精	一、六七〇	一、六七〇	徐鵬志	哈爾濱
滿洲畜産	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	毛遇風	新京
熱河鑛山	一、〇〇〇	一、〇〇〇	川島三郎	新京
滿洲火災海上保險	五、〇〇〇	一、二五〇	島田茂	新京
滿洲葉煙草	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	長谷川浩	奉天
東邊道開發	一四〇、〇〇〇	六三、七五〇	鮎川義介	新京

滿洲特殊製紙	二、五〇〇	一、五〇〇	飯島省一	新京
滿洲共同セメント	一、三〇〇	三二五	竹内徳三郎	新京
協和鐵山	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	上島慶篤	新京
滿洲石炭液化研究所	六、〇〇〇	三、〇〇〇	辻添	奉天
滿洲榨蠶	五、〇〇〇	一、二五〇	松田省三	新京
舒蘭炭鑛	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	野口遵	吉林
滿洲書籍配給	二、〇〇〇	一、〇〇〇	石川正作	新京
滿洲事情案内所	五〇〇	二五〇	奥村義信	新京
滿洲石綿	三、〇〇〇	一、〇〇〇	金子喜代太	新京
滿洲工作機械	二〇、〇〇〇	五、〇〇〇	根本富士雄	奉天

この會社名を見ても分るやうに、これらの各會社は、ありとあらゆる事業に互つて一意専心、その負荷する使命に向つて猪突邁進してゐる。



國際情勢や、國內情勢などの影響によつて、經營上の起伏は免れないが、しかもこれらの各社なかんづくその主腦者は、その負荷する使命の重要性に鑑み利害得失に超越して、ひたすら滿洲國の興隆、延いて戦時日本の經濟力確保に健闘しつゝある眞剣な態度は敬服すべきである。

今日、滿洲帝國が財政、經濟、産業、文化等の各方面にわたつて、驚異的飛躍を遂げたことは、これら各社の献身的努力に負ふところが多いのである。

滿洲國の育ての親であり、大東亞共榮圈の指導者である日本國民は、更に一層滿洲國の興隆發展を期すため、その産業文化の開發に挺身努力しつゝあるこれらの國策會社に對する認識を新たにすると共に、その國策遂行を圓滑順調ならしむべく協力すべきであらう。

## 學 校

建國當時の學校は、全滿を通じて初等學校九千校であつたが、現在は二萬四千校に増加し、大學は奉天に一校だけあつたが、現在では官立十六校、私立六校、合計二十二校を數ふるにいたつ

た。

滿洲事變前までの教育方針は、支那の蔣政權と同じく抗日排日を露骨に採り入れたものであつたが、康徳四年五月二日の訪日宣詔記念日に滿洲國の新學制を公布し、康徳五年一月一日から實施された。その特徴は、

- 一、建國精神の明徴
  - 二、國家觀念の宣揚
  - 三、日滿一徳一心と民族協和精神の體認
  - 四、東方道德の涵養を根幹とし、國民生活の安定に必要な實學を基礎とする
- 教育であつて、特に幼少年の國民教育に重點を置き、日本語を國語の二として重視するものである。

従來まち／＼であつた學校の校名も統一して、初等教育では、

國 民 學 校



國民優級學校

國民義塾

國民學會

とし、修業年限その他大體日本の國民學校と同じ制度になつてゐる。國民學校の名は、日本においては漸く昭和十六年から用ゐられたが、滿洲では一足お先に用ゐてゐた。

中等教育も、やはり日本の中等教育の學制と同様であるが、これを國民高等學校及び女子高等國民學校と稱してゐる校数は二百二十三校。

官立大學は、

法經系統——大同學院、建國大學、哈爾濱學院、新京制大學

醫科系統——新京醫科大學、哈爾濱醫科大學、佳木斯醫科大學

農科系統——奉天農業大學、哈爾濱農業大學、新京畜産獸醫大學

工科系統——哈爾濱大學、新京工業大學、奉天工業大學

等があるが、國民學校から大學を卒業するまでの全段階を通じての修業年限は十三年又は十四年とし、滿二十歳、又は二十一歳で大學を卒業することになつてゐる。

以上各學校の學生生徒は、日滿一徳一心の建國精神を體認して、民族協和の實を擧げ、いかなる邊陲の地でも、その祝祭日では可憐なる國民學校生徒たちが、日本と滿洲の國歌を齊唱してゐる。

かうした教育方針の下に育てあげられた青少年たちが、やがて滿洲帝國の中堅となつて起つたことになれば、一段と國運の隆昌を見ること至必である。

## 映 畫

建國前後には、全滿を通じて映畫常館設は三十館だけにすぎなかつた。それが現在では百九十館に増加した。

滿洲國政府は、映畫は國策の上に重大な役割を持つものとして、これが普及をはかるため康徳



四年八月二十一日滿洲映畫協會を設立し、五百館開設を目標として新館の設置に努める一方、文化映畫、劇映畫、ニュース映畫の製作に力をそそぎ、その配給權も掌握してゐる。

かくて康徳四年十月、新京市黃龍公園に隣接する丘陵地に、五萬坪の敷地を卜し、三百萬圓の巨費を投じて大スタヂオの建設に着手したが、同六年の秋竣成し、東洋第一であることは勿論、世界屈指の大スタヂオを出現するにいたらしめた。

このスタヂオの完成とともに、甘粕正彦氏が滿洲映の理事長となつた。甘粕氏は畑違いの軍人出身であるが、豫て愚劣な股旅物や、あるひは低俗な戀愛物、またはユダヤ的思想の宣傳の具に供される物などの映畫が、甚しく社會の良風美俗を害し、又は危險思想の温床となつて、計り知れざる害毒を流してゐたを痛憤してゐた人であり、さらし映畫業者が私利追求のため、好んでこれらの悪映畫を流布してゐた事實を極度に憎んでゐたので、この弊毒を撲滅すべく進んでその重責に任じた。

さうして、啓蒙と、修養と、實益を與ふると共に、健全娛樂として大衆の愉悅を目標とする映

畫の作製に乗出した。一方、映畫常設館の開設に努め、映畫館のない地方には、國民學校を利用する等、専ら國民思想の健全なる育成に努力してゐる。

東京に支社を設置して、曾て愛國革新運動の闘士であつた茂木久平氏が支社長となり、映畫の輸出入を始め、俳優、脚本の斡旋その他あらゆる必要の事務にあたり、水も漏さぬ陣容を確立してゐる。

### 新聞通信

滿洲事變前までは、張學良及び米英系等の排日新聞や通信が相當に多く、滿洲の民衆を抗日陣營に引きこむことに大意になつてゐた。

由來、ペンは劍よりも強しといはれてゐるほどで、民衆に對して強力な指導力感化力を持つてゐる。蔣介石の如きは、新聞を「紙彈」と稱して、各縣ごとにこれを發行し、民衆を重慶側へ引きつけることにやつきとなつてゐる。



滿洲の民衆の内にも、この排日新聞のために毒せられて、排日思想を懐くやうになつた者もあつた。不良新聞通信は、たゞに民衆を毒するばかりでなく、國家を毒すること甚しい。そこで、滿洲事變後これらの不良新聞通信は眞先に撲滅整理せられ、國策に協力する新聞の助長發展が計られた。さらに康徳三年四月には、勅令第五十一號を以て株式會社滿洲弘報協會が設立された。

滿洲弘報協會は、滿洲國政府の弘報處（日本の情報局に同じ）の方針に基いて、同協會直屬の滿洲國通信社をして國內の新聞社へニュースを提供することは勿論、國外に向つて國策の宣揚に當るほか、ラジオ放送、映畫、演劇等の統制に當つてゐる。

弘報協會に加盟してゐる新聞及び通信社は左の通りである。

在滿通信新聞社一覽

社名	新聞紙種類	社長・主幹	所在地
滿洲國通信社		森田久	新京市

滿洲日日新聞	大連日日新聞	松本豐三	奉天市
滿洲新聞社	滿洲新聞	和田日出吉	新京市
哈爾濱日日新聞社	哈爾濱日日新聞	寒河江堅吾	哈爾濱市
東滿新聞社	佳木斯新聞	八木市松	延吉
大同報社	東滿新聞	大石智部	新京市
盛京時報社	實話報	染谷保藏	奉天市
大北新聞社	小北新聞	山本久治	哈爾濱市
泰東日報社	泰東日報	高柳保太郎	大連市
黑龍江民報社	齊々哈爾新聞	片山誠三	齊々哈爾市
熱河新報社	熱河新報	森常雄	承德市
三江報社	三江日報	安井徹	佳木斯市



安東新聞社	安東新聞	佐藤武雄	安東市
東滿日日新聞社	東滿日日新聞	須佐美芳男	牡丹江市
滿鮮日報社	滿鮮日報	李性在	新京特別市
マンチュリア・デーリー・ニュース社	マンチュリア・デーリー・ニュース	小野敏夫	新京市
ハルビン・スコエ・ヴレーミヤ社	ハルビンスコエヴレーミヤ	古澤幸吉	哈爾濱市
滿洲經濟社	滿洲經濟	藤川安夫	新京市
錦州新報社	遼西辰報	下野重三郎	錦州市

これら各新聞社及び通信社は、例外なく國策協力第一を標榜して活潑なる活動を展開してゐるが、なかんづくこれに従事する記者は、まるで自分一人で滿洲國を背負つて起つてゐるやうな烈々たる氣魄を持った志士的人材が多いので、日語新聞といはず、滿語新聞といはず、將又歐字新聞といはず、紙面に潑刺たる生彩を發揮し、従つて強大な感化力を以て民衆に臨んでゐる。

其 他

人口の増加、教育の普及、生活の安定等によつて、各新聞とも將來の大發展が約束されてゐる。

なほ、建國後著しい發展を遂げたものを舉ぐれば、建國當時三ヶ所であつた放送局が今日では十七ヶ所となり、従つて聴衆者も建國當時二千人であつたのが、今日では約四十五萬五千人となつてゐる。

また、電話加入者は建國當時三萬五千口であつたが、今日では十一萬六千八百八十口に激増してゐる。電燈數は百二十萬燈であつたのが、約三百五十萬燈となつた。

鐵道の乗客は、一ヶ年八百萬人内外であつたのが、今日では約五千萬人となり、自動車道路は三千軒だつたのが六萬軒となり、その他農産、鑛産、林産、畜産、水産、商業、發電能力等、ほとんど隔世の感あるまでに飛躍してゐるが、これが具體的な數字を擧げるとは差控える。

何れにしても、これは滿洲國が産業、文化の面において顯著な發達を遂げた證左として欣快に



## 滿洲建國の功勞者 (下)

### 日本人の卷

#### 滿洲事變に参加せる皇軍將兵

滿洲建國の功勞者として日本人を擧ぐれば、先づ第一に柳條溝事件以來、滿洲各地において勇戦奮闘せる皇國將兵を擧げねばならぬ。

この事變に参加した皇軍將兵は、それまで舊滿洲を獨占して、日本の勢力を滿洲から驅逐しようとしてゐた張學良及びその麾下の軍隊を剿滅して、滿洲國建設の基礎を築いたばかりでなく、實に今日の大東亞戦争の口火を切り、世界歴史大轉換のスイッチを入れた大功勞者である。殊に

この戦闘において戦死又は戦傷した勇士の功績については、深く感謝せねばならぬ。

さらに政治、經濟、文化等の方面における建國の功勞者も少くないが、紙數の限りある本書においては、その全部を掲ぐることは困難であるから、各方面の代表的人々を掲げ、これを通じて全般の功勞者を偲び、且つこれに感謝することにした。

### 本 庄 繁

本庄繁氏は、滿洲事變勃發當時の關東軍司令官であつた。

寢耳に水のごとく柳條溝事件勃發の報告に接した本庄司令官は、これをいかに處理すべきかについて深思熟慮した。といふのは、當時全滿を通じて日本軍は二萬ぐらゐであつたが、張學良軍は三十萬を數へ、しかも彼等は計畫的に日本軍打倒の準備をしてゐたので、日本軍は數の點において、準備の點において、甚だ不利な立場にあつた。

それに、日本中央政府の意嚮や、國際關係などを考慮に入れる必要もあり、迂濶なことをすれ



ば、累を祖國に及ぼすことになる。

けれども、刻々に達する報告は、張學良軍が本格的に日本軍攻撃の暴舉に出たといふことであつたので、今は一刻も猶豫すべきにあらずとして、斷乎張學良軍を撃つべく命令を發した。むろんこれには、三宅參謀長、板垣高級參謀、石原參謀なども參畫した。

かくて、寡兵よく敵の大軍を制して赫々たる戦果を收め、その後の作戦を順調ならしめたのであつた。

もし、この時本庄司令官が中央政府の指示を待つたり、國際關係に躊躇したりしてゐたならば機を失して、あのやうな迅速な大戦果を收むることは困難であつたかもしれない。

さらに事變處理についても非常に苦心し、殊に建國に關しては、滿洲側に協力して大いに努力し、遂に立派な獨立國家を築きあげた。

新京で執政奉戴式が行はれた時、本庄司令官は外國人側の最高位官として參列したが、事變から建國へとかくも速かに運んだことに對して、感慨無量であつたらうと思はれる。

本庄大將は、明治九年兵庫縣に生れ、陸士及び陸大を卒業してゐる。軍籍に入つてから日清・日露の兩戦役に参加して武勳を樹て、典型的武人として部内の信望を荷つてゐた。沈毅、寡黙、片言隻句といへども苟くもしないのが、ひとたび意を決すれば斷々乎として敢行する底の勇者である。

功により男爵を授けられ、現在は軍事保護院總裁、在郷陸軍大將として、戦時下日本のために誠忠を盡してゐる。

## 土肥原賢二

滿洲事變勃發當時、奉天特務機關長であつた土肥原大將（當時大佐）の鮮かな活躍ぶりについては已に述べたとほりである。

殊に、事變勃發三日後の奉天に臨時市政が布れるや、將軍は軍服市長として奉天市政を掌握し當時滿洲の首都であり、事變の中心地であつた奉天市を抑へて貧乏搖ぎもさせなかつた鮮かさは



早くも日本に傳つて「滿洲に土肥原あり」といふ心強さを感じしめた。

しかも一方には、支那服を着込んで北滿の奥地でも駆けまはつて、新政府の組織促進に協力したのであつた。

支那事變では各地に轉戦して驚異的作戰の妙を發揮し、赫々たる武勳を樹てた。

現在は陸軍航空總監兼軍事參議官として、大東亞戰爭の重要な役割を分擔してゐる。

氏は岡山縣の産、陸士、陸大を卒業し、多年支那に在勤して熱心に支那を研究し、支那語は支那人以上だといはれる位に精通し、殊に會話は堂に入つたものだ。滿洲事變當時の活躍にも、この支那語が大いに役に立つた譯である。

### 板垣征四郎

すでに述べたとほり、板垣將軍は滿洲事變當時關東軍の高級參謀として、戰政兩略の立役者として血みどろの奮闘をした。

ある將軍は、

「板垣を除いて滿洲事變を語ることはできなう……」

と言つたが、それほど板垣將軍はこの事件と密接な關係がある。

事變後は、滿洲國軍政最高顧問として、滿洲國の治安維持、建國の素地工作等に縱横無盡の活躍をし、中央に於ても「滿洲に板垣あり」と言ふやうになり、その將來を囑望されてゐた。

果して、將軍はその後關東軍參謀長となり、滿洲の要人たちからは「板垣大先生」と尊敬されてゐた。支那事變が起るや、將軍は我が精銳を率ゐて出征し、南口の激戦、太原城の攻略、徐州大殲滅戰等に偉勳を樹て、間もなく非常時日本の陸軍大臣となり、さらに支那派遣軍總參謀長となり、現在は、朝鮮軍司令官となりて、大戰下日本の重要なポストに据つてゐる。

板垣大將は、東條首相と同じく岩手縣の生れ、幼少の頃から南部の藩家老だつた祖父桑蔭翁の厳格な教育を受け、長じて盛岡中學から士官學校、陸軍大學校と順調な道をたどつて來たが、その割に一徹なところがある。いやしくも公私を混同するやうなことがなく、あくまで國家本位で



あると共に、また満洲國を非常に愛してゐる。

曾て、近親の青年が満洲國に就職したいと言つて、東京世田ヶ谷の將軍の邸宅を訪ねて来たことがある。大和民族の大陸大移動を念願とする將軍は大いにこれを歓迎したが、さて

「君は何のために満洲國に就職したいといふ氣になつたのか」

と訊くと、その青年は不用意にも、

「満洲は、日本よりも俸給が大變い」といふことを聞きましたので……」

と答へた。すると將軍は聲を勵まして、

「よせツ！ 君みたいな俸給を目的とするやうな青年は、神聖な満洲國に行つてはならぬ」と一喝したのであつた。

これは、將軍が満洲國を熱愛する氣持の現はれであると共に、公私を混同しない建前を示すものである。

満洲國と陸続きの朝鮮に重要な任務についてゐる將軍としては、蓋しその處を得たといふべき

であらう。

尙、將軍は支那事變における赫々たる武勳により、昭和十七年三月殊勳甲として功二級を賜はり、武人としての大なる光榮に浴したのであつた。

### 石 原 莞 爾

石原將軍は、満洲事件勃發の際は、關東軍司令部の參謀であつたが、三宅參謀長、板垣高級參謀等とともに本庄司令官を輔けて機宜の處置をとり、寡兵よく學良の大軍を撃破するの作戦の妙を發揮したのであつた。

爾來、石原將軍の勇名は日滿兩國に喧傳され、その將來を期待された。

將軍は山形の産で、陸大の出身、多分に哲學的要素を持ち、ナポレオンの研究家として有名である。現在立命館大學の講師。



## 東條英機

世界轉換史を描く第一人者として、名譽地球を蔽ふ東條英機將軍も、建國直後の滿洲國に、關東軍憲兵司令官として治安の任に當つてゐた。

その頃、全滿に蠢動する匪賊は三十萬と稱され、その中には正規軍の敗殘兵もあり、殊に蔣政權からの援助を受けて、兵器、彈藥、軍資金等を豊富に有する匪賊團もあつて、その勢侮るべからざるものがあつた。

なかんづく、東邊道一帶における匪賊は最も猖獗を極め、その中心地たる岫巖には、政府まがひのやうなものさへ置いて、紙幣まで發行してゐる状態であつた。

東條將軍は、これを一舉に殲滅しようと思つたが、憲兵司令官では纏つた軍隊を動かす權能がなかつた。そこで將軍は、その權能に屬する憲兵隊と警察官を總動員して、自らその陣頭に立ち、敵の虚を衝いて散々に蹴散らしてしまつた。

「破天荒なことをするものだ。しかし東條將軍でなくては出来ない放れ業だ」と、今になほ滿洲の語り草となつてゐる。

更に、將軍が關東軍司令官となるに及び、一段とこれに力を注ぎ、國礎の根本的確立に絶大な功績をあげた。

かうした積極的匪賊討伐によつて、匪賊の數も漸次減少するにいたり、現在では僅かに數百名を残すのみとなつた。

むろん、將軍の在滿中は、單に匪賊の剿滅に力を注いだばかりでなく、あらゆる部面にわたつて建國の大理想に邁進したのであつた。なかんづく建國思想の徹底には最も力を盡した。

總理大臣兼陸軍大臣としても、常に盟邦滿洲國の健全なる發達に意を用ひ、特に北邊の護を強化した。今次の大東亞戰爭が、連戦連勝、完勝の一途に向つて進展しつゝあるのも、北邊の護が安固であることが、その大なる原因の一つである。

東條將軍こそは、正に天が我が國に恵んだ不世出の英傑であり、賢哲であるといふべきである



將軍は岩手縣の出身、陸大を優等で卒業したゞけに頭腦は緻密で組織的であるが、決して秀才型といふ肌合の人でなく、剛毅果斷、古武士のやうな半面を持ち、また濃やかな人情味を持つてゐる。

關東軍憲兵司令官時代、公務中に卒去した新京署勤務の一巡査の遺族を、わざわざ新京驛まで見送つて慰めたことや、内務大臣を兼任してゐた時代に、交番の巡査や郵便配達夫に會つて下情を訊いたりしたのは有名な話である。

ひところ、ヒットラー、ムツソリーニ、チャーチル、ルーズヴェルトなどの演説が長々と日本の新聞に掲載されるのを見て、「日本の總理大臣の演説も外國の新聞に掲載されるやうにならなくてはいけない」と、羨望したり、憤慨してゐた者もあつたが、今日では逆に、東條首相の片言隻語といへども、堂々と外國の新聞に掲載されるやうになつた。

むろん、それは雄渾無比なる大東亞戦における皇軍の赫々たる戦果による日本再認識と、その日本の大きな屋臺骨を背負つて立つ立役者といふことに對する關心から來たものであるが、同時

に東條首相の演説に何等の懸引もなく、言つたことは必ず實行するといふ誠實味と凄味があるからである。

長期を豫想さるゝ大東亞戦争に、東條首相の責任は重く、且つ繁忙である。一億國民はいふに及ばず、一徳一心の滿洲國四千万國民が等しくその健康を祈念して已まざる所以である。

### 小磯國昭

小磯將軍は、滿洲國建國に當つては關東軍參謀長として、建國後は拓務大臣として、現在は滿洲移住協會理事長として、滿洲國今日の盛觀を築く上に大きな功績を有してゐる人である。

殊に、關東軍參謀長時代には、身命を賭して建國の理想實現に粉骨碎身の努力をしたのであつた、従つてその政治的見識や手腕は、軍功とともに高く評價されてゐる。

滿洲國における軍功として特に擧ぐべきものは、蘇炳文のホロンバイル事件、熱河作戰、張鼓峰事件等において赫々たる偉功を奏した。戦功により功二級を授けられた。



現在將軍が主宰してゐる滿洲移住協會は、日本側の民間機關であるが、その任務は拓務省の代行機關として日滿にある各機關と連絡協調し、開拓民及び幹部の募集、訓練、送出等に當つてゐる。

百萬戸五百萬の大和民族大陸大移動を目標とする開拓事業は容易のことでないが、しかも最近顯著なる成績を挙げつゝあるのは、將軍の手腕によるところが多い。

將軍は山形縣の生れ、陸軍省軍務局長、陸軍次官、關東軍參謀長、第五師團長、朝鮮軍司令官、拓務大臣といふ輝かしい關歴を持つてゐるが、夙に大陸政策について造詣がふかいは、郷土の先哲佐藤信淵の「混同秘策」の著書に負ふところがあると稱されてゐる。

### 梅津美治郎

日本と滿洲國とは、肇國の精神を同じくする不二一體の神嚴なる關係におかれてゐるが、しかも建國二千六百餘年の歴史を有する日本は、建國漸く十年に及べり若き滿洲國に對しては、正に

その親たり、兄たる指導者の立場にある。

従つて、滿洲國に存在する我が最高機關の主腦者の任務は極めて重大である。

梅津將軍は、現關東軍司令官兼滿洲國駐劄特命全權大使として、わが在滿機關の最高峰にあるが、その任務は職名の示すがごとく、軍事、政治、外交その他一切の指導的立場にある。

即ち、關東軍司令官としては日滿不可分、共同防衛の本義に基き、滿洲國軍を援助指導し、これと協力して滿蘇蒙國境を警備し、さらに滿洲國內治安の維持に當つて、日滿全國の國威發揚に努め、同時に滿洲國の民族協和、王道樂土の理想的國家完成を支援しつゝある。日本が、北邊について何等後顧の憂ひなく、大東亞戰爭を遂行できるのも、全くこの關東軍による北邊の護りが安固不動によるためである。

また日本大使館は、日本帝國を代表する外交機關で、關東軍その他の在滿日本機關と協力し、日滿兩國の特殊緊密關係の強化、滿洲國の健全なる發達を眼目としてゐる。

治外法權撤廢後も、在滿大使館の任務はきはめて重大で、日滿兩國々交の調整は勿論のこと、



滿洲國とその未承認國との間の外交の處理、既承認國との間の修好改善についても、事實上仲介斡旋の勞をとりつゝあり、殊に滿洲國境に瀕發する紛争事件についても、所在各機關と協力してその處理に遺憾なきを期してゐる。

さらに、滿洲拓植委員會、日滿經濟共同委員等を通じて滿洲の經濟、開發問題等にも參與し、その關係事務はきはめて廣汎にわたつてゐる。

滿洲國皇帝陛下の御訪日や、張國務總理の謝恩特派大使としての訪日などには、梅津大使の並々ならぬ心勞があつた。

關東軍司令官は、本庄將軍の時代では司令官一本建であつたが、建國後は武藤大將より引續き菱刈隆大將、南次郎大將、植田謙吉大將、梅津美治郎大將と、全權特命大使を兼任することになり、各將軍とも日滿兩國のために偉大なる功績を擧げてゐる。

殊に、現任の梅津將軍は、大東亞戰爭による滿洲國の立場がますます重要性を加へてきたためその任務はいよゝゝ重く、しかも日兩一如の關係を一段と強化し、滿洲國をして積極的に大東亞

戰爭に協力せしむるに至らしめた。

將軍は、長らく支那大陸に在勤し、かの有名な梅津・何應欽條約を結んで、一時緊迫した日支關係を解決したこともあり、支那事變には赫々たる武勳を樹てゐる。

責務いよゝゝ加重せる今日、切に將軍の健康を祈るゆゑである。

### 駒井徳三

建國前後における駒井氏の活躍は素晴らしいものであつた。

板垣參謀とともに滿洲國要人を説き、あるひは初代總務長官としてリットン調査團と折衝し、あるひは滿洲國承認について日本朝野の間に奔走し、さらに大同學院の初代院長として有爲有能の官吏養成に努むる等、文字通り血みどろの奮闘をしたのであつた。

北滿の邊境にあつた馬占山を追うて、單身敵中に乗込み、彼を歸順せしめたのは實に駒井氏であつた。そのため馬占山は一時滿洲國の軍政部長となつた。



間もなく馬占山は離反するに至つたが、それは駒井氏とは関係のないことであつた。

馬占山離反の秘話として面白い話がある、

建國後、最初の閣議が開かれた後、鄭總理以下各閣僚が一堂に會して晚餐會を開いてゐる席上に、日本のある新聞記者が訪ねて行き、その記念として列席の要人に揮毫を乞うた。すると、何れも得意の麗筆を揮つたが、いよ／＼馬占山の順になると、列席の一人が馬占山に向つて、

「君は字が書けないから、馬の繪でも書いたらどうだ」と、軽い意味で揶揄した。

すると、馬占山の顔色は見る／＼うちに變つて、全身の血が逆流するかと思はれるやうな凄惨な形相となり、さらに痛はしいやうな哀れツぽさに變つていつた。事實、綠林出身の馬占山は、眼に一丁字もないのであつた。彼はその急所を衝かれたのだ。

けれども、彼は自分の名前だけは書けたと見えて、金釘流の文字で「馬占山」とだけ書くや否や、筆を投じてさツさと宴席を引きあげてしまつた。

果して彼はその翌朝駒井總務長官をその官邸に訪問し、

「黒河に残してある家族が病氣であるから、軍政部長を辭めて家族のところに戻りたい」と言つた。

駒井氏は、昨日の出來事を知つてゐたので、彼の言葉の裏を十分に察することが出來たが、いま彼の辭職を許すことは、野に虎を放つやうな危険があるので、極力その驕意を求めたが、彼の決心は遂に動かすことができなかった。

駒井氏は、目下兵庫縣下に康徳學院を經營してその校長となり、將來大陸で活動する人材の養成に當り、既に多數の有爲の青年を滿洲に送つてゐる。

駒井氏は滋賀縣の生れ、大正元年札幌農大を卒業すると、すぐ滿鐵に入社したが、當時の總裁中村是公氏は、氏に見るところあつて、大正三年の春二萬圓の旅費で歐米を視察してくるやうにすゝめた。けれども、駒井氏はこれを斷つて、滿支全部を旅行して將來の對滿支政策の基本調査をしたいと云つた。中村總裁はこれに感激して、その經費八萬圓と五人の從者を與へた。



この調査報告書は、實に二萬頁に餘る老大なものであつたが、これが滿洲事變や支那事變にどれだけ役立つかはいふまでもない。

その後、滿鐵をやめて故山に晴耕雨讀の日を送つてゐたが、滿洲事變勃發するや、小磯國昭將軍にすゝめられて、關東軍財政部顧問となり、一身を挺して困難にして危険な第一線に活躍し、建國後と共に初代總務長官となつて、前述のやうな目覺しい活動をしたのであつた。何れにしても、滿洲建國の育ての親として忘るべからざる人である。

## 金井章二

滿鐵と滿洲建國とは切つても切れぬ深い關係を持つてゐる。

滿洲事變が、存外有利に發展したことも、建國運動が順調に進んだことも、滿鐵が多年にわたつて扶植した地盤と勢力があつたからである。

殊に、その人的方面において貢献したことは非常に大きい。前述のやうに柳條溝事件勃發の際

は、時を移さず軍用列車の編成をなして、皇軍をして機を逸せず戦闘に當らしめ、あるひはその社員が身を挺して危険な任務に當つて多くの殉職者を出すなど、全く血みどろの奮闘をしたものであつた。

金井章二氏は、當時滿鐵の醫務を司つてゐた醫學博士であつたが、豫て有事の際に備へるため滿鐵の青年社員を中心として、滿洲青年聯盟を組織し、日本精神の涵養と、身體の鍛錬に努めてゐたが、事變勃發するや否や、たゞちにその青年聯盟の義勇隊を率ゐて奉天に乗込み、關東軍に協力して治安維持、文化工作、宣撫と目まぐるしい活躍をした。

關東軍は、氏を高く評價し、建國後は奉天省の要職につき、更に間島省の省長となつて、滿洲國における模範省をつくりあげたが、偶ま支那事變勃發して、皇軍の張家口入城となるや、皇軍の急電に接してトランク一つで飛行機に乗り、未だ硝煙の生々しい張家口に乘込んで、新政府の設立、金融の整理、舊紙幣の回収、難民の救済、交通の整理と矢継ぎ早に實行し、徳王を主席とする蒙疆政權の最高顧問となつた。



氏は、最近職を辭して歸國してゐるが、かゝる有爲の人材は、必ずや再び華々しい脚光を浴びて戦時日本の要路に立つであらう。

金井氏は信州上田の産、東大の醫科を卒業して北里研究所に這入つたが、研究と趣味から讀書を何よりの樂みとし、特に諸外國の新聞雜誌を熱心に讀んだ。その讀書餘録ともいふべきものを當時土屋清三郎氏が經營してゐた醫學雜誌に匿名で寄書し、大いに日本の醫學界を啓發してゐた。「誰が一體こんな識見ある論文を書くのか」

と、當時の醫學界の話題となつてゐたが、その本人が誰であつたかは今に至るまで殆ど知る人はなす。

文章もうまいし、また洋畫もうまい、閑地についた今日、その才筆を以て自叙傳でも書いて出版したら、世を益することが大きいであらう。

### 直木倫太郎

直木倫太郎氏は、技術家であるため、表面に現はれる華々しい點がなく、従つてその存在もあまり有名でないが、實際においては滿洲建國のために大きな貢獻をしてゐる功勞者である。

直木氏は内務省畑の人で、工學博士、關東大震災後は、復興局の要職にあつて主として道路、橋梁等の改修、新設等を主宰し、見事な成績をあげたのであつた。資性清廉にして溫厚、その職務に忠實なことを生命としてゐる。

建國後、招かれて國土建設の重要な役割を持つ國道局の局長となり、自ら滿洲の奥地に踏入つて、匪賊の危険を冒しつゝ國道開設のために奮闘努力した。その結果、現在ではいかなる奥地にも坦々たる大道が開通し、産業、國防、文化の上に計り知れざる寄與をしてゐる。

現在、滿洲國參議として重きをなしてゐるが、建國當時、氏と共に滿洲國の要職に就いた人々が殆ど交代した中であつて、氏は黙々として十年の歲月を、滿洲帝國のために捧げてきた。蓋し



建國功勞者中特筆すべき人であらう。

二八二

氏は明治九年兵庫縣に生る。東大土木科を卒業して内務省土木局に入り、爾來たゞ一と筋に土木關係の職務に關係してきた。滿洲國政府が、技術官出の人を重用して、參議府參議としたことは、最も賢明な措置といはねばならぬ。

### 大村卓一

交通機關の整備と不整備とは、一國の産業及び文化の盛不盛に重大な關係を持つてゐるが、特に滿洲國のやうな新興國家にとつては最もそれが重大な關係を持ち、なかんづく未だ治安の確立しない建國當時においては、特にその整備の必要があつた。

大村氏は、滿洲事變直後、關東軍交通部長兼關東局交通部長等の要職にあつて、文字通り寢食をわすれて滿洲の鐵道開發にあたり、現在のやうな四通八達せる鐵道網の完成に大なる貢獻をしたのであつた。恰も、現滿洲國參議直木倫太郎氏が、その道路開發に人知れぬ苦勞を重ねて、こ

んにちの立派な道路網を完成したこと、同様である。

滿鐵副總裁八田嘉明氏が、これまた滿洲の鐵道開發に大きな足跡を残して去るや、その後を襲うて副總裁となり、さらに總裁松岡洋右氏が去るや、そのあとを繼いで總裁の椅子に就き、今日に及んでゐる。

滿鐵は、滿洲事變勃發以來、單に交通機關の建前からばかりでなく、あらゆる角度より皇軍に協力して事變遂行に協力し、殊にその社員中、多くの戦死傷者を出したほど勇敢に、眞摯にその職務に盡瘁したのであつた。されば、本事變の功勞により、社員にして行賞の恩典に浴した者實に三萬九千餘人に及ぶ輝かしい功績を挙げたのである。

滿鐵は、周知のごとく日露戦争後の明治三十八年九月ポーツマス條約によつて日本がその經營權を得、次いで同年十二月北京において成立した日清滿洲善後條約並に附屬協定によつて、長春（今日の新京）の鐵道及び撫順、煙臺などの炭礦經營と、當時軍事鐵道であつた安奉線の改築と經營權を獲得し、これに基いて明治三十九年十一月成立したものである。

二八三



だから、滿鐵の一尺の線路にも、一坪の附屬地にも、日露戦争に出征したわれわれ日本人の父や兄の血が通ひ、魂がこもつてゐる。實に嚴肅なる「勝利の記念塔」である。

爾來、滿におけるわが特殊權益は、實質上滿洲における國家政策の代行機關たる崇高なる使命を有する滿鐵を軸心として發展して來たが、米英は滿洲が經濟上、軍事上重要な地位を占めてゆく状態を見て垂涎措く能はず、屢々滿鐵の存立を脅かすが如き行動に出で、果ては張家二代の政權を使喚して滿鐵包圍線及び平行線を敷設せしめ、これに拍子づいた學良政權下の軍隊は、遂に滿鐵の線路を爆破するの暴舉に出た。

滿鐵の線路を爆破したことは、日露戦争戦歿勇士の墓標を破壊したと同様である。關東軍が痛憤したのは當然すぎるほど當然だ。

建國後、滿鐵は改組されて鐵道、病院、學校、ホテル等の附屬事業を除くのほか、多くの重要産業機關を滿洲國に移譲したが、しかし全滿の鐵道委員經營の重大任務を帯び、いよ／＼その本質的使命たる交通機關整備に専念することになり、永らく大連にあつた本社を奉天に移して陣容

を新たにした。

世間には、滿鐵が附屬事業を移譲したことを見て、恰も滿鐵の地位が低下し、弱體化したかの如く云ふものがあるが、それは現在滿鐵の經營下にある全滿にわたる鐵道網がいかに雄大なものであるか、いかに重要な使命を有するものであるか、またその委任經營が移譲した附屬事業よりも遙かに高度なものであるかを全然知らない者である。即ち滿鐵の地位は改組前よりも却つて向上し、事業は擴大してゐるのだ。

大村氏は、改組後の總裁として一種の鐵道大臣たる立場にあるが、重役及び全社員また滿鐵の使命を體して銳意その改善發展に努力してゐる結果、こんにちでは社運隆々たる盛觀を呈してゐる。

大村氏は福井縣の生れ、北大土木工學科を卒業後、北海道鐵道、シベリア鐵道、山東鐵道、朝鮮鐵道等の要職にあつたが、滿洲ではその長い貴重な體驗に基いて鐵道經營に當つてゐるのであるから經營がうまく行く譯である。



ことし七十一歳であるが、壯者を凌ぐ元氣で張切つてゐる。日滿兩國を通じての鐵道界の貴重な存在である。

### 鈴木貞一

鈴木將軍は、滿洲事變前後は中佐として陸軍省軍務局の軍事課にあつた。いはゆる少壯將校として部内に重きをなし、常に烈々たる革新論を主張して來たが、それは氏の犀利な數學的、哲學的、世界史觀等による日本の實力に對する確信から出發したものであつて、空疎な机上論や、一時的の昂奮感激による慷慨ではなかつた。

従つて、松岡全權が滿洲問題について國際聯盟會議で苦闘してゐるのを見て齒痒くてたまらず斷然聯盟を脱退すべしと主張した。部内外の同憂具眼もこれに共感して共同戦線を張り、遂に全國的に聯盟脱退の輿論を沸騰させたのであつた。

かくて鮮かな聯盟脱退の大芝居が打たれたが、聯盟諸國はこれに對して一指をも下すことが出

來ず、却つてこれを契機に全くその威信を失墜してしまつた。同時に滿洲國の威信は急に高揚されるに至つた。

もし、あの時聯盟の壓迫を恐れて、聯盟の勸告の一部分にても聽従することがあつたならば、滿洲帝國今日の盛強を見ることは出来なかつたであらう。

建國後間もなく、鈴木將軍は北滿警備第一線の要職に就き、國防の完璧を圖つたばかりでなく交通機關の施設や産業の開発等に大きな貢獻をしたのであつた。將軍が常に滿洲を愛し、滿洲の健全な成長を祈念してゐるのは、かうした關係があるのも、その理由の一つであらう。

將軍は千葉縣の出身、興亞院が設置さるゝや政務部長となり、支那事變と併行して新中華民國の建設に縱横無盡の快腕を揮ひ、間もなく陸軍中將に榮進した。

第三次近衛内閣には國務大臣として入閣し、事實上の副總理たる地位を占め、さらに東條内閣成立するや、國務大臣兼企畫院總裁として、軍需省たる性格を持つ企畫院の機能を極度に發揮し大東亞戰爭遂行に萬遺憾なきを期してゐることは世人周知のとほりである。



## 星野直樹

毀譽褒貶の多い人であるが、星野氏の眞骨頂を知つたならば、何といふ生ませじめな、そして熱心な人であらうかといふことになる。若し、氏に對して兎やかくいふ氣があつたら、それは星野氏の生ませじめと、仕事熱心の飛ばツちりを浴びたものだ。

滿洲事變當時、氏は大藏省營繕管財局の官有財産課長であつたが、滿洲國から特に希まれて、建國後五ヶ月目の七月に滿洲國政府に入り、財政部總務司長となり、新興國家の多難な財政を背負つて、粉骨碎身の努力をつゞけた。そしてその手腕と努力を買はれて總務廳長官となり、いよ／＼その眞價を發揮し、施政の上に徹底した革新理念を織込んだことは、特筆すべきことである。滿洲ですツかり腕を磨いた氏は、初代企畫院總裁として日本に歸り、滿洲で實行して善果をあげた事を日本でも實行しようとして大いに努めた。

東條内閣成立と同時に書記官長となり、總理の良き女房役として活躍してゐる。

東大政治科の出身で今年（昭和十七年）五十一歳、男子として最も脂の乗りきつた時である。大いに今後の活躍を期待されてゐる所以である。

## 鮎川義介

滿洲國は建國と同時に「滿洲國經濟建設綱領根本方針」を確立し、その第一項目に

一、國民全體の利益を基調とし資源開拓、實業振興の利益が、一部階級に壟斷さるゝの弊を除き、萬民共樂ならしむ。

と規定した。

つまり、世界のあらゆる國家が資本家のために有利な事業を壟斷され、その利益も亦彼等に壟斷され、それによつて生ずる弊害は、遂に國礎を危殆に導くに至るので、新興滿洲國は、それらの轍を踏まざるやう、十分な警戒をしたのであつた。

滿洲國の順な發展を見た日本の資本家、殊に有力な財閥は、新國家の處女資源を開發し、又は



新事業を起して、しこたま儲けようと垂涎措くあたはざる状態であつたが、何しろ建國の根本方針が既成財閥の跋扈を絶対に許さないことにあつたので、手も足も出なかつた。

けれども、滿洲國としては餅は餅屋にやらせる方針のもとに、日本から適当な産業人の渡滿を求めて、經濟建設綱領根本方針に則り、重要産業の經營に當らしむべく物色し、鮎川義介氏に白羽の矢を立てた。

當時、鮎川氏は日産を統率し、日本における新興財閥の新鋭として雄飛してゐたが、滿洲國政府の要請を受くるや、日滿經濟ブロック確立の重要性に鑑み、勇躍これに應じて日産の滿洲移駐となし、康徳四年（昭和十二年）十二月廿七日新たに滿洲重工業開發株式會社を創設しその總裁に擧げられた。

その創立に當つては、日産の資本金二億二千五百萬圓を加へて、滿洲國政府が同額の二億二千五百萬圓を出資し、資本金四億五千萬圓の大會社とした。

更に、それまで滿洲における重工業に携つてゐた昭和製鋼、滿炭、滿洲輕金屬、同和自動車、

滿洲採金の五會社を子會社として滿洲重工業の傘下に入れ、これら子會社を發展せしめつゝ新しい子會社をも設立して、子會社生産事業を親會社の立場より統轄することによつて、大規模重工業の綜合經營をなすといふ方式を採つた。

かくて、この五つの子會社は、何れも非常な速度をもつて發展し、さらに子會社として新たに滿洲鑛山、滿洲飛行機、東邊道開發、滿洲自動車、協和鐵山の五會社を設立したほか、本溪湖煤鐵も傘下に入れて、滿洲重工業開發株式會社の規模は、日本の大コンツェルンに匹敵する陣容を形成するにいたつた。

殊に、子會社の營業成績は頗る良好にて資本金、生産力ともに各々擴大し、滿業設立當時の資本金合計二億三千二百萬圓であつたのが、康徳六年末の合計は八億八千五百萬圓となり、約四倍に増額した。

生産力も各局面にわたつて飛躍的増大を呈してゐるが、現下の時局に照應して専ら軍需關係の製造及び地下資源開發に重點を置き、支那事變及び大東亞戰爭の戦力強化に絶大なる寄與をなし



つゝある。

鮎川氏は山口縣の出身、東大機械科を卒業後、芝浦製作所の一職工となつて働き、ついでアメリカの鑄物工場の職工となつて従業員の實情を身を以て體驗した。

名門の出身であるが、今後社會に立つて活動するには、社會の下部組織から研究する必要ありとして、自ら進んで工員生活に身を投じたのであつた。歸朝後、三十一歳にして九州の戸畑に資本金三十萬圓の鑄物會社を設立して社長となり、これまでの體驗を生かして業績大いに擧り、資本金も二百萬圓に増資したが、義弟久原房之助氏の主宰する久原鑛業が、久原氏の病氣のためそれを引受けて日本産業株式會社とし、次ぎ／＼に各種各様の會社を併合して、日産コンツェルンを築きあぐるに至つた。

氏の事業に對する信念は、事業は國家に貢獻することに於て意義がある。經營者や従業者は、國家からこれを依託されてゐる者である。従つてその利益も壟斷するものにあらずといふのであつて、日産全盛時代の株主五萬二千人を數へたのも、事業を開放して廣くその利益に均霑させる

ためであつた。滿洲國政府が鮎川氏に白羽の矢を立てたのも、かうした自信を高く評價したことに因る。

氏は今年六十三歳、事業家としても男としてもいよ／＼圓熟の境地に達したのだ。長期を豫想さるゝ大東亞戰爭下における大事業家としての氏へ期待する所が大きい好漢自重加餐すべきである。

□

滿洲重工業は、東京市芝區田村町にその支社を置いてゐる。日産コンツェルンの本據として建てられた壯麗な白聖館である。

滿重工業開發株式會社は、日滿兩國の關係からいつても、同社の性格からいつても、日本と密接不離な關係を有し、従つて東京支社の任務は極めて重要な役割を受持つてゐる。同時に、その支社長たるべき人は、異常の人材であらねばならぬことはいふまでもなく、總裁鮎川氏とピツタリ呼吸の合ふ人でなければならぬ。而して現支社長田中恭氏こそは、正にその適材適所といふべ



きである。

田中氏は和歌山縣の出身、東大英法科を卒業後大蔵省に入り、滿洲建國後たゞちに希まれて滿洲國政府財政部の理財司長となつた。星野直樹氏は同じ財政部の總務司長であつた。

その頃は、日本の中央政府から新興滿洲國に轉出することを、まるで都落ちでもするものゝ如く過つた考へを持つ者も少くなかつたが、日本と一徳一心の關係にある新興國滿洲こそ大いに働き甲斐ある地として、欣然その招きに應じたのであつた。

かゝる意氣込みで乗込んだだけに、文字通り血みどろの奮闘努力をなし、建國早々の困難な財政に當り、財政部大臣熙洽氏を輔けて優秀な成果を擧げた。

滿洲重工業開發會社が設立さるゝや、鮎川氏の熱心な希望によつて、同社の財務部長となり、さらに財務部長兼東京支社長となつた。

田中氏がある人に云つた言葉に、

「滿洲は若い國である。そして思想も若くて純である。従つてこの新興國を育て、ゆくには、こ

の若くて潑刺な思想の持主であり、また理解者でなくてはならぬ」といふのがあつた。

鮎川總裁も、田中支社長も、この若い思想の持主であり、理解者である。その他人材雲の如し滿洲の將來こそ刮目して待つべきである。

なほ、こゝに特記すべきことは、滿洲國は日滿經濟一體化に基き、大東亞戰爭勃發前後から、戰時物資として必要な各種の資源を盛に日本内地に輸送してゐたが、昭和十七年三月末には、戰時物資中最も大切な銑鐵の供給が遂に豫定量を遙に突破するにいたり、我が戰時態勢強化に資すところ大なるものがあるが、これは滿洲重工業開發會社の努力に負ふところが多い。恐らく今後是一段の協力をなすであらう。

### 椎 名 義 雄

滿洲には、各種の資源が無盡蔵に包蔵されてゐるが、これを開發して利用厚生に資しよ



と志す者は、建國前までは殆ど稀であつた。

なぜならば、匪賊襲撃の危険と、爲政者、特に張父子の苛斂誅求によつて、折角の努力も往々にして水泡に歸すからである。しかも滿蒙毛織株式會社はこの危険と暴政に對して敢然と挑戦し大正七年十二月奉天において創立、爾來滿蒙の豊富な羊毛を利用して各種の羊毛品を製造してきたが、果して前述のごとき危険と暴政の被害の絶ゆることなく、業績次第に悪化し、昭和五年に至つてその存立さへ危ぶまるゝに立至つた。

しかし國策的使命を有する同社であるから、このまゝ没落さす譯には行かぬので、關係方面においては、同社の國策的使命に深甚の關心を有してゐた當時陸軍の主務官であつた現貴族院議員陸軍主計中將三井清一郎氏、當時千住製絨所長であつた長廣謙次郎氏、時の東拓總裁故宮尾舜治氏、同理事池邊龍一氏（現在同社副總裁）等は、協議の上その經營者に有能練達の士を据へて頼勢すべくその適任者を物色した結果、當時東京市大井町の新興毛織株式會社顧問技師であつた椎名義雄氏に着眼し、その出馬を懇望した。

椎名氏はその任にあらずとして固辭したが、熱心な懇望にほだされて遂にこれを受諾し、昭和五年五月同社技師顧問として赴任した。

椎名氏は、一旦引受けた以上は斃れて後己むの氣魄と、羊毛報國の決意を以て經營に當つた。しかし當時の滿蒙毛織會社は社員の俸給も拂へぬ窮狀にあり、構内の樹木の枝をおろしたものは、これを乾燥して薪として賣り、經營費の一端に充當するといふ慘めな状態であつた。又、椎名氏自身もいろゝの理由で身邊の危険に晒されてゐたので、毎夜ピストルを懐いて寝るといふ有様だつた。

氏は、入社して約二ヶ月の後、即ち六月廿八日常務取締役兼推舉されたが、普通の會社の重役とちがつて、自ら販賣の第一線に立つて毛布やラシヤを擔いで賣りあるき、あるひは街頭に製品を並べて路行く客に呼びかけるなど、その苦勞は一と通りでなかつた。

滿洲事變勃發の直前には、張學良政權の壓迫は愈々峻烈となつたが、氏はこれに屈せず奮闘し、事變勃發當時は皇軍の奮戦に呼應して、在留邦人の先頭に立ち、有效適切なる行動をとり、



大いに皇軍の活躍に資すところが多かつた。

滿洲建國後、滿洲の情勢は一變して同社の業態も活潑となり、従つて經營も順調に赴き、昭和七年十一月には奉天目抜き場所に株式會社滿蒙毛織百貨店を創立し、單に同社の製品ばかりでなく、いはゆる各種の百貨を販賣し、日本人その他の入滿者に對して滿洲特産物を提供し、また滿洲國人に對しては日本及び支那の各種商品を提供して、商品による日滿支親善に資した。

かくて社運いよ／＼隆昌に赴き、昭和九年六月には専務取締役となり、昭和十四年十月には社長となり、ます／＼羊毛國策に精進すると共に、資本金を二千萬圓に増資し、工場も奉天工場以下七工場を算し、その他傍系會社廿社の社長又は會長として、時局下最も緊要なる各種の事業を經營し、滿洲の産業開發に資するのみならず、滿洲人に對する生活の道を興へ、いはゆる安居樂土の體制確立に絶大の貢獻をしてゐる。

氏が入社した當時の資本金五十萬圓、しかもその存立さへ危まれてゐた時代に比較すれば全く隔世の感なき能はず、いかに一個人の力が一社、一國の運命を支配するかを、氏の事業を通じて

痛感せらるゝのである。

氏は群馬縣佐波郡剛志村の出身、大正四年七月東京工業大學の前身たる東京高等工業學校を卒業するや直ちに東京府下大井町の後藤毛織株式會社に入社、爾來専ら羊毛事業に關係してきたもので、氏の半生は羊毛に終始してゐる。

さきに秩父宮殿下御訪滿の折、氏は親しく殿下に拜謁仰せつけられて畏き御言葉を賜はり、大いに發奮して一段と優良品の製造に邁進し、從來滿蒙の羊毛は毛織として優良品たる能はずと稱されてゐたものを、氏の苦心研究によつて遂に濠洲羊毛に比較して何等遜色なき毛織を製出するに至つたもので、ひとり滿洲帝國の産業に寄與するのみならず、不二一如の關係にある日本の産業、なかんづく軍需工業に貢獻するところ絶大である。

氏は常にその尊敬する故澁澤榮一翁の

成名毎在窮苦日 敗事多因得意時

といふ箴言を座右の銘としてゐるだけに極めて恭謙、しかも赤城おろしの下に育つた烈々たる負



けし魂は、いかなる困難危険に遭遇しても僻易することなく、ますます雄志を旺盛にして一意羊毛報國に精進してゐる。氏は漸く四十九歳にして大いに春秋に富む。好漢自重して更に一層の大を期せよ。

### 清水揚之助

滿洲國は、大同二年（昭和八年）三月「滿洲國經濟建設綱要」を聲明し、その根本方針として第一項に

一、國民全體の利益を基調とし資源開發、實業振興の利益が、一部階級に壟斷さるゝの弊を除き、萬民共榮ならしむ

と經濟建設不動の鐵則を定めたのであつた。

これは、世界の資本家が主要産業を獨占して、その利益追及に汲々とし、これを壟斷して一般國民はこれに均霑しないばかりか、却つてそのために苦汗を嘗めさせられつゝある現状に鑑み、

財閥や大資本家の入滿に對して豫防線を張つたのである。

實際、建國早々の滿洲國に財閥や大資本家が乗込んで、利益本位に掻きまはされたら、その健全なる發達は絶対に不可能である。殊に、滿洲國の土木建築のごときは、國防上に最も關係が深い部分があるので、いろ／＼の缺點からして絶対に滿洲國の信認する者でなければ依頼できないことになる。

だから滿洲國では、日本から土木建築業者を招くに當つても、その人選に慎重な態度をとつた株式会社清水組が、建國と共に重要な土木建築の任を委託されたのは、要するに滿洲經濟建設綱要の精神に一致する商魂を高く評價された結果に外ならぬ。

建國後、清水組の手によつて建築された重要建物は數ふに遑なく、新京の官廳、會社等は勿論特に奥地における困難な事業を進んで引き受け、重要不可欠の建築部面に涙ぐましいほどの努力をしてゐる。

奥地の工事場には、これまで屢々大群の匪賊が襲來して慘害を與へたことがあるが、盡忠至誠



建築報國の精神に裏づけられた「清水組魂」の堅持者たる従業員は、勇敢にこれらの匪害と戦つて、契約の期日までにはキチンと依頼者に引渡すといふ状態であるから、ますます依頼者側の信任を深めてゐる。

新京の忠霊塔は、故武藤元帥一千七百七十三柱の建國の功勞者及び大正八年の寛城子事件における勇士十八柱を祀り、高さ三十五メートルの莊嚴きはまりないものであるが、この工事を請負つた清水組は昭和九年五月十五日より起工して、同年十一月十五日に竣工した。これに要した延勞力四萬五千人、採算を超越して設計よりも立派なものを築きあげたのであつた。なほ哈爾濱その他の大忠霊塔が清水組によつて建設されてゐる。

このほか哈爾濱における開拓移民の指導者養成所その他、主要建物の建築は全滿至る處に満ちあふれ、同社の建國に對する眞摯にして積極的な協力の表徴となつてゐる。

清水揚之助氏は、現在同社の常任監査役であるが、ツイ最近まで同社の副社長として社長代行の立場にあり、自ら北滿の奥地に出かけて現場を監督し、従業員を激勵して「清水組魂」の發揮

に努めてゐた。要するに清水組が挺身滿洲建國に邁進しつゝある半面には、清水氏の徹底した日本主義精神に基く建築奉國の理念が反映してゐるものである。

氏は本年五十六、慶大理財科出身清水組に入り、歐米の建築界を視察して採長補短、しかもあくまで日本本來の建築美を基調とする建築を主張し、あるひは資材不足による建築界の不況に對する同業者の指標を示し、あるひは支那事變勃發後における國民の覺悟を促す所見を發表して銃後強化に寄與する等、多角的な國家奉仕をなしてきた。

今や皇軍の大戦果と俟つて、南方經營もいよ／＼活潑となり、従つて國家觀念に透徹し、且つ斯界における第一人者として衆目の許す清水氏の如き人材の活躍に俟つ所が多い。好漢自重自愛すべきである。

### 宮下 靜一郎

滿洲といへば、直ちに地平から地平へ太陽の出入する茫々たる大平野といふ感じがするが、實



はその奥地——なかんづく北滿には千古斧鉞を入れない原始林が涯でもなく續いて、あらゆる良材が充満してゐる。

けれども、これを開發するためには、第一匪賊や猛獸と戦ふ勇氣を要し、次に相當の資本を要する。さういふ關係で進んでこの富源を開發する者はなかつた。

宮下靜一郎氏は、大正十三年敢然起つてこの難事業に當つたのだ。東泰洋行を創立して哈爾濱に本據を置き、孜孜營々として林業開發に努力してゐるうち、滿洲事變が勃發し、ついで滿洲建國となり、木材の必要はますます加重した。即ち氏はこの時こそ多年苦心した林業開發を以て國に酬ゆるの秋が到來せりと勇躍一層の努力をした。

建國早々の滿洲國においては、木材不足に當惑してゐたが、東泰洋行の献身的努力によつてこれを緩和することが出来、官民を擧げて非常に喜んだ。

氏は、木材搬出のためと、沿線住民の便に供するため、同行の林業所のある濱江省葦河縣に私設鐵道八十五キロを敷設し、さらに二百五十町歩にわたる農場及び牧場を經營して食糧補給に寄

與してゐるが、業績頗る良好にて、大連、天津に支店を設け、大阪に出張所、徳島に林業所を置く等、きはめて廣汎なる營業網を張り、單に滿洲國のみならず、祖國日本の産業に多大の寄與をしてゐる。

氏は明治二十七年群馬縣に生れ、東大法學部を卒業後三井物産に入り、臺北、大阪等の支店に歴任したが、大正十三年大陸開發に志をたて、入滿以來今日に及んだもので、今後の氏の活躍こそ刮目に値する。

### この功勞者達

滿洲建國の功勞者は、まだ書きつくされないほどあるが、遺憾ながらすでに制限された紙數に満ちてきたので、たゞその姓名だけを擧げ、後日を期して詳述することにした。

即ち軍關係としては磯谷廉介、田中隆三、橋本虎助之、多田駿、三宅光治、松井太一郎、佐々木利一の各將軍及び小林省三郎提督、はあるひは帷幕にあつて、あるひは第一線に立つて、建國



の基礎を確立した人々で、永劫わが青史を飾る人々である。

官界にあつては建國直後から長い間外交部次官の要職にあつて、現在は蒙疆聯合自治政府の最高顧問となつてゐる大橋忠一氏、法政局長だつた大達茂雄氏、國務院總務廳長であつた遠藤柳作氏、同じく長岡隆一郎氏、參議だつた筑紫熊七氏、田邊治通氏、實業部の要職にあつた岸信介氏（現商工大臣）、同じく椎名悦三郎氏、同じく美濃部洋次氏、通信事業の建設に貢献した現情報局次長の奥村喜和男氏、駒井長官の下に總務廳次長として財政の基礎確立に大きな足跡をのこした阪谷希一氏（現中國聯合準備銀行顧問）、金融界確立に貢献した田中鐵三郎氏（現滿洲中央銀行總裁）等々がある。

滿鐵側の功勞者としては、故内田康哉氏を始め、松岡洋右氏の偉大なる存在はもちろん、十河信二、平島敏夫、大藏公望、宇佐美寛爾の諸氏を逸することは出来ない。

言論界では、滿洲國通信社長森田久氏、滿洲日日新聞社長松本豊三氏、滿洲新聞社長和田日出吉氏等が、現に輿論統一のために善處し、奮闘しつゝある偉大な功勞を認めねばならぬ。

民間側では、建國の當初から蔭になり日向になつて活躍した河本大作、甘粕正彦、大川周明、徳川義親、石原廣一郎、清水行之助、笠木良明、森田福松（故人）、藤田勇の諸氏が、人知れぬ大きな功績を印してゐることを忘れてはならぬ。

なほ、前掲の各特殊會社の代表者及びその首腦者は、現に滿洲國興隆のため、さらに大東亞戰爭完勝のために、鋭意各自の分擔する使命遂行に奮闘努力しつゝあつて、その努力の結果がいかに戦局を有利ならしめてゐるかを銘記すべきである。

□

——しかしながら、滿洲國の地位は微妙なる國際情勢下の北邊の鎖めとして、また大東亞戰爭の同一戦線に立つものとして、今後いよゝ重要化して行くのであるから、上述の功勞者たちの豊富且つ深刻な體驗に徴して一段の寄與を俟つこと切であり、さらにわが國民は、滿洲帝國の實體を把握して、その健全なる成長に協力し、支援すべきである。

これ、日露戰爭以後、今日まで滿洲の野に、山に尊き屍を埋めてゐる我等の同胞に對する唯一



昭和 17 年 1 月 15 日 印刷納本  
昭和 17 年 1 月 20 日 發行

滿洲建國誌

◎ 定價一圓八十錢  
送料一〇錢

著者  
發行者  
印刷者  
發行所

永松淺造  
東京市神田區神保町二ノ一九  
設樂得二  
東京市本郷區眞砂町三八  
眞保三郎  
東京市神田區神保町二ノ一九



學友館  
會員番號 一〇六〇八〇  
振替 六五三八九九  
電話 (九段) 〇五六九九

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式会社

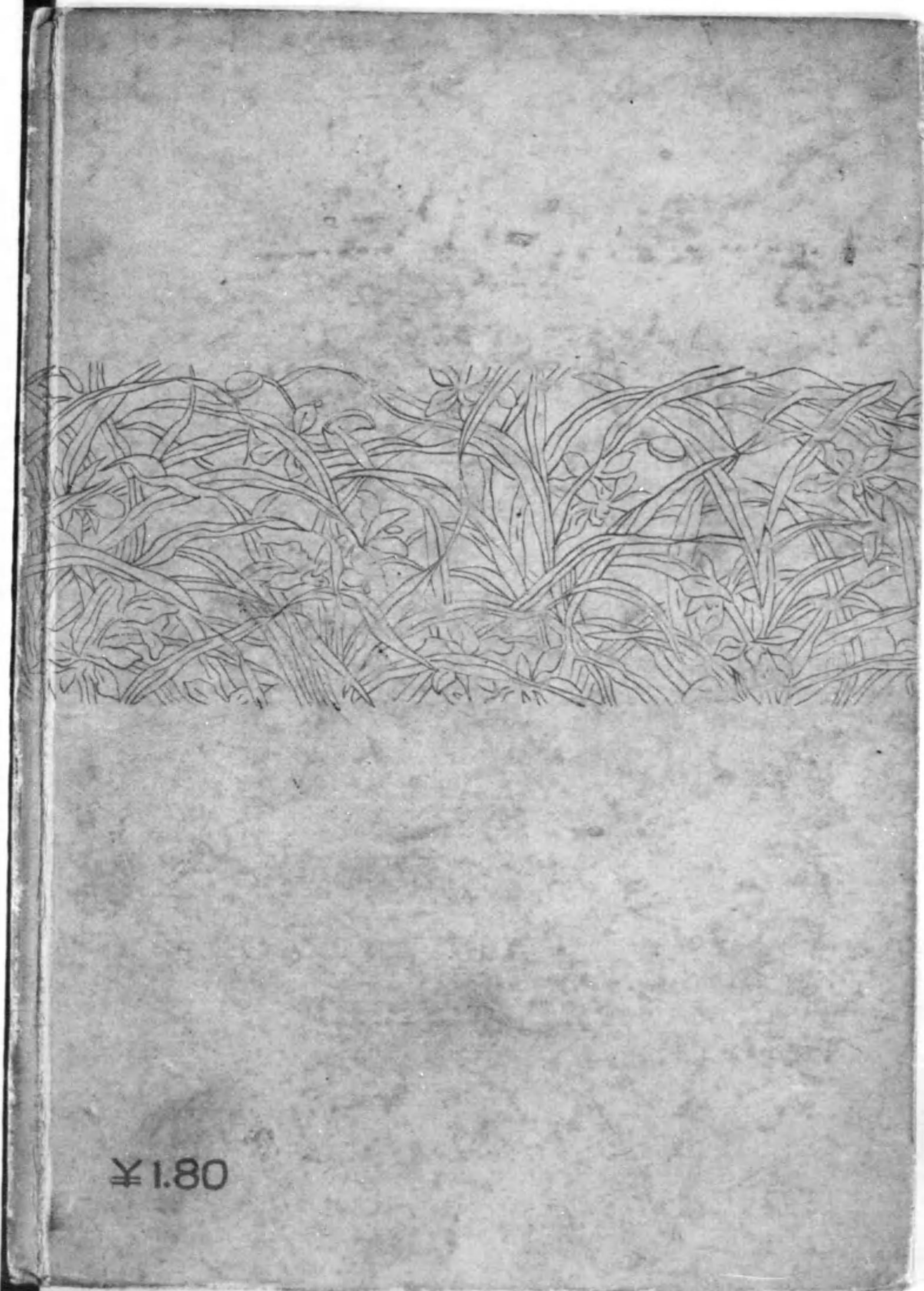
の手向であり、又一徳一心の友邦滿洲國に對する最大の贈物である。(終)



94
66



終



¥1.80